

---

**狂犬王子にお仕えしています。**

河の上リン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狂犬王子にお仕えしています。

### 【NNコード】

N5749N

### 【作者名】

河の上リン

### 【あらすじ】

突然見ず知らずの男たちに拉致されて、気づけばガルダム国第6王子、ゼイル様にお仕えすることになったわたし。

この王子、世間では、病弱で滅多に国政に顔を見せない麗しの幻影王子として名高いんだけど、実は国王直属の秘密組織『狂犬』の若きリーダー。しかもD5で最凶最悪の魔王みたいな男だったのだ。なんでか分からぬけど気に入られたあたしは、王子付き専属メイド兼狂犬のメンバーとして、日々奮闘する羽目に…。

## 口二池の攻防（龍書形）

思ひつけでほじぬました。どうなるか分かりませんが、よかつたら  
見てやつてください。

## 川池での攻防

神様。一つお尋ねします。

もしもこの世界に本当にあなたがいるのなら。

私は一体どんな罪を犯したのでしょうか。

教えてください。

どうして、私にこんな試練をおあたえになるのか。

どうして私はあんな、あんな王子の部下になつたのでしょうか

…。

つていうか、あたしに何の恨みがあるんですか！？！？！？

あたしは神様への呪いの言葉を胸に刻みながら、必死に逃げ回る。  
ここは水の中。後ろにはぱっくり口を開けたワニ。  
そして極め付け。

あたしは泳げない。

「いやああああああ

卷之三

「なんで、なんであいつら、陸の上では人の足には敵わないのに、水中だとあんなに早いんだ！！！ ものすごいスピードで、あたしを平らげよう」と常にお口は準備万端状態。

そしてあたしはまさかの難易度高い着衣水泳。かといってここで泳げないからといって諦めれば、あたしの末路は溺れたところをワニに食べられるか、もしくは溺れる前にワニのおなかの中がどちらかだ。

「アリババ」のアリババ

だから必死で手も足も体全体も使ってがむしゃらに逃げ惑う。しかし、本当に呪いたいのはこの状況でも、ワニでも、実は神様でもない。

「おーテイ！ 逃げ回つてないで、さつさと例のブン探せ！」

池のふちで優雅にタバコなんぞ吸つてはいる、あの最低最悪男だ！！

あいつ、泳げないと知つていながらあたしを池にたたき落とし（しかもワニがいるつて知つてるくせに）、あまつさえ池のビニカにあるとと思われるある証拠品を取つて来いつて命令したのだ。

「ちょ、ゼイル様、無理ですって無理無理無理…わっへ」

勢い余つて水が喉の奥まで入り込む。が、そんなあたしのある意味命を懸けた訴えにも、彼は耳を貸してはくれなかつた。

「無理？んな言葉、俺の辞書には載つてねえから」

じゃああんたがやれ！…なんて言えないあたし…。彼の下についてもう長いこと経つけど。あの鬼畜で悪魔みたいな男は、決して助けてはくれない。ならば、自分の命は自分で守るしかない！

幸い水での動きもつかめてきたので、あたしは拙い泳ぎをしながら必死に打開策を考える。

問題はあのワードだ。あいつをえいなくなれば、まだ勝算はある。

あたしは犬かきをしながら辺りを見渡す。個人の所有する池にしては広い方で、綺麗な睡蓮も浮いていれば水草も漂い、飛び石なんかもおいてある風情な作りだ。それを見たあたしはふと、あることを思いついた。

ふむ、いけるかもしねえ。

あたしはその中でも一番大きな石に目を付ける。あれをあれしてあれすればあれにならないだろうか。ええい、考てる暇はない！あたしはスピードをあげると、囮めばあたしの腕、ふたまわり分はりそなその岩をを目指す。

そしてなんとかそこまで辿り着くとその石にしがみついた。それから乱れた呼吸と疲労した表情をあえて顔に張り付け、ワードの方を見た。

彼（彼女かもしれないけど）は疲れ切ったあたしを見てわずかにほくそ笑む（かどうかは分からんけど、少なくともそんな風にあたしは見えた）と、スピードを落とし、ゆっくりと近づいてくる。あたしはそこから動かない。ワードの目がきらりと光った。

その姿はもろに、弱つてゐる獲物をじわりと追い詰める肉食動物そのもの。よつやぐ「飯にありつけぬ… そんな彼の思いが伝わつてくれる。

そしてそのままの速度でぐんぐんやってきて、大きく開いた口を更に大きく広げ、あたしの体」と丸のみにしようと覆いかぶさつて… 今だ！ その瞬間、あたしは電光石火の速さで石から離れる。

直後、ガリッという固い音が辺りに響いた。間一髪、あたしはワニの恐怖の一 口から逃れる。あの音から察するに… 見ると、ワニが岩を食べている状態。

「ふう、よかつた成功した」

もちろん、 そうなるように仕向けたんだけど。あたしを丸のみしようと限界まで口を開けて襲い掛かり、案の定あのワニ、岩が喉まではいりこんで抜けないらしい。頑張ってジタバタしてるけど、びくともしない。顎も外れてそうだ。

この隙にとあたしは腰にさした刃物を鞘」と引っこ抜く。刃は出さない。あの長官と違つて罪もない生き物を叩き斬る趣味はないし。ではどうするかというと。あたしは水中で必死に足をもがかせながら鞘を付けたままワニの方に近寄ると、その無防備な頭に思いつき手にしたそれを叩きつけた。

「どうや　…………」

鈍い音がして。見事にヒットしたあたしの武器で頭をやられたワニは、そのままの格好で気絶する。

「…………とらあえず、助かつた」

ほんと、九死に一生つてのひとなんじやないのかな、うん。

さて。それで本題はここからだ。あたしはこの水の中で、あるブツを見つけないとならない。早くしないとワードが起きちゃうし、かといって上司は…あ、茶飲んでる。

絶対手伝ってくれる気踏無だ。分かつてたことだけど。

あたしは手にした武器を腰に差そうと（またワードが襲つて来た時ように持つとかないと不安だ）…つもりがわざわざ、そのまま落下していくあたしの武器。

「！？ やば」

慌てて水に顔を付けるとあとを追う。重みでどんどん下まで落ちて行き、ついには最下部に辿り着いた。水は綺麗だから視界もよく、すぐに落とした刀を見つけることができた。そんなに深くなくてよかつた。

今度はきちんと腰にしまつと、あたしは上に上がらうと…ん？

田の前にはあのワードがくつついでいる石。その石の一一番下に、なにやら怪しげな物体がくくりつけられている。明らかに人工物だ。急いで近づくと、縛つてあった紐を刀で切る。

それは長方形の真っ黒な箱、だった。

これは…もしかしてもしかしなくとも、あれなんじやないのか？必

死に探し求めていた、例のヅツ。そんなに重くないので、あたしはそれを手にしたまま上に上がる。荷物を抱え、短期間でマスターした犬かきを駆使し、そしての男のところに戻ると、どすんと彼の足もとにそれを置いた。

「王子、おそらくこれじゃないでしょうか?」

うー、しかし寒い。水の中にいたらどうでもなかつたけど、陸に上がると風が身にしみる。だつて季節は10月も終わり。秋風がビュービュー吹き荒れる頃合いだ。寒さに凍えながらあたしが着ていた服を絞つていると、なんともおもしろくなさそうな顔で御仁<sup>仁</sup>がぼやいた。

「なんだ、もう見つけたのか。つまんねえな」

「いや、なんでつまらないんですか。つていうかあれ以上あそこにいたら、あたし生きて戻れないですって」

「慈悲で助けたワニが復活して、もう一ラウンドって思つてたんだがな」

そう言つてクククともろ悪人顔で笑う。なんだその笑い、完全に黒い笑み…つて以前に、全く王子っぽくないんですけど。

「あたしを殺す気ですか!?」

「大丈夫だ。いざとなれば助けに行つたさ。多分」

「多分つて絶対その気ないですよね…つてそれよりどうします?これがギ付いてますけど」

薄情な王子のことはひとまずおいといて。あたしが命がけで持つてきたこいつには、頑丈そつかつ複雑そうな鍵が一つも付いている。しかし王子は何ともなしにしれつと言い放つた。

「え、もう開けたけど」

そして彼が力ギを持ちあげた瞬間、パーンと鍵がはじけ飛んだ。

「はやー!？」

なんだその早開けの技術。一介の王子が、強盗でも生業にしてたんですかってくらいの腕前だ。

「お前がちんたら陸に上がつてゐ間にとづく壊した」

その手には細長い針金が。成程、ピッキングか。仕事が早いことで。

「さて、それじゃあ中身を拝見するか」

もはやただの箱と化したそれを、王子は乱暴にぱんと開け放った。あたしも興味シンシンで覗きこむ。すると中には…

「やつぱりな

そこのは、あたしたちが探し求めていたものと、そしてなぜか大量の女物の下着が入っていたのだった。

## □ 事件報道…（一）（論書モ）

時代背景とかは「じゆげい」とか「じゆひき」ですが、あんまり気にしないでください…

## 「事件報告」（1）

「それで、あの男は面白したのか？」

「こ」は、ガルダム王国のサイド城最上部にある、とあるお部屋。中は豪華絢爛で、西国から渡つて来た装飾品やら置物で彩られている。そんなお部屋の、大きな窓の前に。

大きな長机に両手を組み、あたしたちを見つめる一人のお方の姿があつた。

険しい顔つきであたしたちを見据える彼「こ」も、「こ」の強大で巨大なガルダム王国のペリカニッドの頂点に君臨する、ザイレン王である。

彼は一昨日起つた『ドミニゴ伯爵麻薬所持容疑』（別名・ワード事件）の報告に来たあたしたちの話を黙つて聞いた後、そう言った。

するとあたしの前に立つゼイル王子はにやりと笑みを浮かべながら言い放つた。

「ええ、もちろん。べらべら全部話してくれますよ。あれじゃあ黒幕に辿り着くのも時間の問題かと」

すると、歴代の王の中でも一番厳格だとして知られるあの王様の顔に、珍しく笑みが浮かんだ。

「さすがは『黒い狂犬』。狙つた獲物は逃がさないな。一体どんな手を使って、自分の非を認めようとしなかつた頑固者を口説き落とした？」

「こやこや、それほどでも。俺は何もしかじゃないですよ。あの男が自発的に、勝手にしゃべってくれてるだけですから」

しつと軽い言葉で、あたしは思わずシックリをこれもうしなる。

「世間ではあれを、脅迫と呼ぶんですよ、と。

まあそれにしたって、ゼイル王子の取り調べは見事だった。

麻薬を購入している疑いの掛けられた、デミンゴ伯爵。しかしその実際のブツが彼の屋敷で押収されて尚、しらをきり、自分の罪を決して認めようとしなかった。そんな彼のいる部屋にやって来たゼイル王子。

あきらかに堅気でない雰囲気をふんふんさせ、くわえ煙草で入ってきた彼は伯爵の正面に座ると、開口一番じつ切り出した。

「お前の庭の池から、ブツが押収された。いい加減罪を認めたらどうだ」「うだ

しかし当の伯爵は、田の前に「狂犬」と呼ばれる組織のトップが相手と知つていながらも、顔をぶいと不愉快そうにそむけ強気な口調で、

「ふん！それがどうした。わしの屋敷にあつたからといって、それがわしの者とは限るまい。屋敷で働くメイドや庭師の可能性もあるだろうよ」

なんでメイドや庭師があんな危険極まりないワニ池に、麻薬なんて

隠す。んな命の危険犯さなくつたつて、別の選択肢があるだろ？

「だがあの池にはワニがいた。あんたにしかなつかない、非常に凶暴なワニだ。そんなところに果たしてお前以外の者が隠せるか？」

「そんなことわしの知つたことではないわい！！現に隠せているではないか。わしではないがな」

「うやつて、わじじゃないの一点張り。さすがにあたしたちもお手上げ状態だつたんだけど…。

すると王子はふうと息を吐くと、こうこう場ではあまり見せたことのない、柔らかな微笑みを浮かべて伯爵を見た。

そして次の瞬間、彼の口からとんでもない言葉が飛び出した。

「分かりました。ではお帰りいただいて結構です」

「！？！？！？」

え、いや、だつて、どう考えたつてこのおっさんが犯人じゃない！？なのに本人が認めていないからといって、あつさり逃がしちゃうの！？

脇で見ていたあたしは慌てふためくけど、王子は全く動じず笑顔のままだ。

「分かればいいんじゃい、分かれば。じゃあわしは本当に帰るからてたくせに（戸惑いの顔を見せていたけど、彼の言葉が本物と分かると鼻息荒くふん、と言つた後その場から立ち上がった。

「分かればいいんじゃい、分かれば。じゃあわしは本当に帰るから

な

「ええどつも。お氣をつけて」

そして伯爵が足を踏み出さうとした瞬間、王子は「ああそう言えば「  
と言葉を切りだした。

「昨日見つかった箱の中には、麻薬のほかに女性用の下着がいくつ  
も見つかった。しかもどれも使用済み」

「……！？」

「見つかりたくないもの、っていうことで、麻薬とその下着を誰にも  
見つからないだろう場所に隠したんだろうが。人の趣味にとやかく  
言うつもりはないが、まさか天下のドミニゴ伯爵が下着泥棒的な  
趣味をお持ちだったとは驚きです」

「待て、わしにはそんな趣味はないぞ？」

「失礼。では自分でつけて楽しむ性癖をお持ちだったとは」「  
黙れ、どちらも違うと言つていいだろ？！おのれ若造の分際で  
わしに意見するつもりか！？」

顔を紅潮させてゼイル王子の胸元を掴む。あたしが止めに入らうと  
すると、王子はそれを手で制した。それからなんともない口調で言  
葉を続ける。

「いえそんな滅相もない。まあ別に伯爵にそんな趣味があるうと罪  
になる訳じゃないし、今回の事件にもなんら関係がない。ただ、伯  
爵にそんな趣味があると、俺もどこかでぼろつと言つてしまふかも  
しない。例えば行きつけの花街のなじみの女とか。近くの茶屋で  
働く女の子とかに。そして人の噂話とは早いもの。いくらこっちが  
口止めしても必ず外部に漏れる。しかもはじめより大きくなつて  
世間に広まると言つのが世の常」

「違うと言つていろんだろうが！－わしが誰だか分かつて言つてるんだろくな！？もしもそんなことをしてみる！－ただじやおかなからな－！」

しかし全く臆す様子なく、ゼイル王子はひょいと肩をすべめた。

「どうぞお好きに。だがいくら俺に報復したといひで噂が消えることはない。下着を付ける、もしくは盗む趣味がある変態親父、っていう噂があつた事実は消えないし、これから先一生変態呼ばわりされるんじゃないのか？」

「ぐぬぬぬぬぬ」

「俺には耐えられないね。世間に変態のレッテルを貼られて生きて行くのは。白い目で見られえて、後ろ指さされて、あーあ、かわいそうに……」

「……」

「麻薬をやつって捕まりました、つていうのと、そういう変態的趣味の男…。おいティ。お前ならどっちが嫌か？」

唐突に話を振られて、あたしは思わず体をびくっとさせた。え、えと、どっちが嫌かって？うーん、麻薬をしていいつていうのは犯罪だし、もちろん許されないことなんだけど。でも正直、

「生理的に受け付けないのは後者です」

瞬間、伯爵の目がかつと大きく見開かれる。驚愕、ショックっていう感じ。反面、王子は目であたしに、「よく言つた」って言つている感じがする。

それからザイル王子は、再びこつこり笑つた。せつせつと同じ優しい顔。いやでも、違う。これはいい笑顔だ。

他人を追い詰めたときに見せる、有無を言わさない裏ありまくらの、いつもの王子らしい邪悪な微笑みだった。

「お引き留めしてしまって失礼。どうぞお引き取りください」

その瞬間、伯爵は手に入れていた力を抜き、その場にへなへなと崩れ落ちた。

伯爵が全てをぶちまける方を選んだのは、当然である。

つまり、自分の変態的性癖を世間に公表しない代わりに、麻薬のことは認め、知つていることは全て話すと。

しかし正直あんな取り調べ、彼にしかできないことだと思つ。あの脅迫のやり方は、本当にすごいかった。確実に相手を追い詰める手法は、さすが狂犬のトップ。

あたしはあの時思つたもん。この男、絶対に敵に回したくないって。

## □ 事件報告... (2)

「しかしこれで事は進展しそうだな。お前のおかげだ  
「お褒めいただき光栄です」

すると王様は、今度はあたしの方に向き直ると、

「ゼイルに聞いたぞ。今回、よく頑張ったそつじやないか。なんでもワニのいる危険な池に自ら飛び込み、証拠品を探し出したとか」「...? は、はい」

自ら、って部分はまつたくもって違うけど（かといって訂正しないし）、それ以外は大体当たっている（つていうが、有無を言わせない圧力に負けただけだけど...）。

すると国王はこいつと笑いかけた。

「その勇気は、素晴らしいーお前のよつな者がいて私は誇りに思ひ。これからも全力を尽くして頑張つてほしい」

「あ、あ、ありがとうございますー! もちろんですが、頑張りますー!」

まさか、まさか王様直々にお褒めの言葉をいたぐなんて...! ? こんなこと、滅多にあるもんじゃない! ! あん時頑張つてよかつた! ! あたしはその場で床につきやつた勢いで頭を下げる。

「この一件、引き続きゼイルに任せぬ。必ず黒幕を突き止めんんだ  
「了解しました。必ず」

あたしたちは佇まいをただし、敬礼をする。そつだ、これで事件は

終わりじゃない。田のは、あの麻薬をばらまいた張本人を捕まる  
ことなんだから。

王様からありがたいお言葉をいただいたあたしたちは、失礼します、  
と頭を下げ、部屋を出る時に再び礼をしてから扉をぱたんと閉じた。

すると、その瞬間、ゼイル王子の纏う雰囲気ががらりと変わった。

さつさまでは、触れれば切れそうな鋭い、それでいて邪悪さを漂わ  
せるオーラで、ニヒルな笑いとか浮かべていた完全に悪役のボス、  
みたいだったのに。

今あたしの田の前にいるそのお姿は、まるで真逆だ。

もともとお美しいその顔には柔軟な笑みを浮かべ、ジントなく儂げ  
でかよわい、それでいて纖細さも持ち合わせたその姿は、まぎれも  
なく国民に愛されてやまない『ゼイル王子（営業用）』だった。

「相変わらずその切り替えの早さ…すいを通り越して気持ち悪い  
です」

「酷いことを言つたな。…お前、後でシメル」

「こやいやいやそんな、嘘ですすみません」めんなど…

やっぱ、つい本音で気持ち悪いって言つてしまつた！？あたしは機嫌  
をやや損ねてしまつた主に慌てて頭を下げる。すると王子はこつこ  
りと笑つて

「冗談だから気にするな」

その瞬間、あたしたちの横をつゝとつとした表情でメイドが通り過

ぎた。彼女がいなくなり、廊下に元の静けさが戻るや否や、その笑顔のまま小さな声で、どすをきかせてゼイル王子が呟いた。

「 もうこいつへんワーピ池に沈めるだ」

「 !?」

そう言い残して、ぶるぶる恐怖に震えてくるあたしをおいてせつと先に進んでいく。

「あ、待ってください」!—!

おいて行かれる訳にはいかない。あたしはあの王子の王子付き従者なんだから!!  
慌ててあたしは主の後を追つて駆け足でついていった。

## 拉致された（一）（前書き）

そもそもの出来事の説明。

## 拉致された（1）

あたし、ヒューティスター・ロッサがゼイル王子に出会ったのは、今から一年前のことである。

場所はあたしのような庶民には一生足を踏み入れる機会がないはずの、白亜城と全世界的に名高い、ガルダムのお城のとある一室だった。

「ふぬぬぬんうぬぬ  
…………」

叫べば叫ぶほど、口が閉まる。苦しい。だけどそんなことに構つて  
る場合じゃない……！

必死に体をもがくけど、後ろ手に縛られた縄をほどけそうもない。  
足の方も同様だ。口には猿轡をはめられてる。

「ぶぶをうううう……  
「ひり、大人しくしろ！？」

黒づくめのお兄さんにより、こんな身動きできない状態のあたしに  
更に拘束がかけられる。

大人2人がかりで押さえられたあたしがかなうはずもなく、じばら  
く暴れたのち諦めて力を抜く。

「ふう、やつと静かになつたか」

と、彼らがどいた隙に、あたしは待つてましたとばかりに最大限に  
暴れまわった。

「ひゅふふふふふふ……」

「」JのJの床をのたうちまわって、とつあえず完全に力を抜いていたお兄さんAにアタック！－見事みぞおちにあたしのキックが入り、彼はそのままダウンする。

「おこお前……」

慌ててBが、一度田の拘束をしようとした時に襲い掛かるけど。

遅い！

あたしは素早くその状態で立ち上がると、思いつきつ縛られた両足で飛び蹴りを喰らわせた。

「がぼつ……」

こちらも見事、頭に命中し、Bはそのまま後ろに倒れ込む。あたしはすかさず頭を膝にくつづけると、飛び蹴りの反動で空中にぶつ飛んだあたしの頭が床にぶつからなこと、なんとか善処する。なんせ受け身が取れない状態なので。

運よく頭から落とせずに済んだけど、その代わり背中からもういちご衝撃を全て後ろで受ける羽田になつた。

「…？」

鈍い痛みが背中一面に駆け廻る。痛い、痛い痛い、めりやめりや痛い！－！カビ、ギリギリ骨ほ損傷せずに済んだよつて、じぎりへくると痛み

もおさまって来た。まあ後で青あざにはなりそうだけど、仕方がない。

あたしは一息つくと起き上がり、改めて周りを見渡した。

かなり広い部屋だ。大体20畳ほどはありそうな部屋。内装はいたつてシンプルで、大きなベッドとソファ、それから本棚があるのみ。後は何もない。殺風景にもほどがある。だけど床にはふかふかな絨毯が敷かれているし、その家具も、細部にわたつて細かい細工が施されているところからして、良質のものだと見た。

といづか。

そもそもここはどこなのか。

時を遡ると、あたしはいつものように寝室のベッドに入り熟睡して

いた。当たり前だ。もう夜も深い時間帯だ。

草木も眠る丑三つ時、ふと目が覚めたのは、何かが侵入してきた気配がしたからだ。

で、気が付けば、あたしは誰かに口をふさがれ、手足を拘束され、とどめにみぞおちにパンチを喰らつて氣絶した。

それでさつき目が覚めたら、あたしは見知らぬこの部屋にいた訳だ。周囲を見ると、見覚えのない黒づくめの男（というか顔全体が隠れるマスクしてるんだから、見覚えも何もあつたもんじゃない）が2人、あたしの横に立つていたのだ。

おそらく彼らがあたしをこんな状態でどこかに運び出したのは間違いないんだけど……。

正直あたしには全く心当たりがない。あたしはこの街、ベイリンに出てきてまだ半年しか経っていない、天涯孤独の身。そんな短期間の間で恨まれる覚えはとんとない。

とつあえず、ここがあたしの部屋じゃなことは確かなんだけど…。  
ま、考えたつて仕方ない。まずはこの手かせ足かせ口かせをじたる  
のが先だ。

何か助けになるものは…と周囲を見渡すと。

「あれ、あたしの刀！」

ベッドの上に見覚えのある色とシルエット。近づくと、やっぱっ。  
あたしの大事な刀ちゃんが無造作に置かれているではないか！！  
なんでここに、とか、それはこの際どうでもいい。あたしは急いで  
近づくと、じつとそれを見つめる。刀があるとこうことは、刃さえ  
出ればこの恥々しい縄を切れると言つ訳だ。  
ならば簡単。

あたしはぐるりとうしろを回くと、ありつたけの力を振り絞ってなんとか手を動かすと、柄に触れる。それから留め金を外し、少しだけだけど刃を鞘から出すことに成功した。

よし、いけるぞ。あたしはその刃を自分の手の縄に当て、ゆっくりと上下に動かす。

やがて縄はふつうといつ音を立てたかと思つと、すのつと手が自由になつた。

後はもう簡単。足の縄を刀で切断し、最後に口の猿轡をはずす。

「ふう、ようやく解放された！…って、どんなだけきつて縛つてたのよ。道理で痛かったはずだよ」

見ると、ついすら縄の跡が残っている。あたしは十代のか弱い乙女だって言ひのに、将来まで残つたらどう責任とつてくれるんだこんちくしょーーじろりと恨みを込めて倒れたままの男たちを睨みつける。

さて、まあこの人たちのことはどういといて。とにかく今はここから逃げることが先決だろう。

と言つても、場所は不明だけど。ま、外に出たらわかるでしょう。外はまだ太陽は出ていなさげだし、そのことから考えてもあたしが氣絶させられてからそれほど時間は経っていないはず。

そんな短期間で長距離を移動できるはずはないだろうから、おそらくベイリンのどこかなんだうし。

そうと決まれば。あたしは、この部屋の唯一の出入り口であるドアへと駆け寄り、警戒しながら扉を開けようと…した瞬間、何の前触れもなくいきなりドアが開いた。

## 拉致された（2）（前書き）

日本はこじめられています。

## 拉致された（2）

「…？…？…？」

頭の中に星が舞う。一杯のお星様。なんてことはない、あたしは見事、勢いよく開いた扉に額を嫌といつほど打ちつけたのだ。

そのまま不覚にも、後ろに倒れてしまった。

しかも、めちゃ痛い。おでこがじんじんする。こりゃあたんこぶもんだ。

一体今日はなんて痛い日に遭う日なんだらつー厄日としか思えない。もう嫌、もう嫌、もう嫌！…………あ、痛いつ！！！

あまりの痛さにそのまま床でころりと転がっていると、急に体が浮遊感に包まれた。天井向いてた視界が、90度直角に早変わり。もちろんあたしの力じゃない。

外部からの働き、つまり、誰かがあたしの体を起こしたのだ。そしてその誰か、なんて、どう考えたってドアを開けた張本人としか考えられない訳で。

「…？」

気が付けば、すぐ目の前に薫色の瞳が迫っていた。というか、田しか見えない。ちょっと待って、この人が誰かとかそういう問題はこの際おいとして、その、この距離、近いんですけど。

だつてあれだよ、相手の目しか見えない距離つて、相当なものだよ？なんだ、これ、ちょっと照れるじゃないか。つてそんな場合じやないぞあたし！

「あ、あの」

息もかかる距離だ。恥ずかしいけど勇気を振りしぼって声出すと、あたしの意志が伝わったのかすっと目が離れる。それに伴つて視界が広がり、その人の全体像と、今のおたしの状況が把握できた。

今あたしは、鳶色の目をした男にがしりと頭を持たれ、じつと見つめられた状態である。

しかもその男、なんといつか、一言で言つと、その、怖い。

いやいや顔がとかじやなくて、雰囲気が。目はなんかこいつちやつてるし、どことなく邪悪なオーラが漂つていて。どう見ても堅気じやなくてその筋の人見えるんだけど。服も髪も真っ黒だから、余計にあつち系に見える。

そんなお方が、

じー、じ  
つと、じ

「……」

何も言わず、無表情のまま、ただ見つめてくる。正直怖い。

「あ、あの」

駄目だ、耐えられない。無言の空気に耐えられなくなり、あたしは沈黙を破ろうと声を出す。すると、今までまったく表情の動かなかつた顔が、ピクリと動いた。

そしておもむろにあたしのおでこに手をやると、急いでアーリー素敵  
な笑顔でにっこり笑つた。

—  
! ?

よくよく見れば」の男、めちゃめちゃかっこいいじゃないか。目が  
いつもちやつてるのはともかく、少しクールだけど整った顔立ちだし、  
そのへんの奴じや比べ物にならないほどだ。

何、なに、なんなの！？思わずあたしは赤面して、男を見つめていた…のも束の間。

いきなり強烈な勢いででこピンしてきやがった。

「ばし」

一瞬であたしの頭は再び星でいっぱいになる、つていうか痛い痛い  
痛い！――だつてそこ、その場所！――あたしがさつきドアに思い  
つきりぶつけた、たんこぶできかけの場所だつて！――

しかもあの音、でこピンなんてレベルじゃない！頭にバズーカ打ちつけられた気分！思わずあたしは床で頭を押さえながら悶絶する。

なんのこの男！あんな満面の笑みで無抵抗の人間の傷口に塗る  
よつな真似するなんて……

意味がわからない……

「う……うちゅうとあなた……」

あたしは痛みから若干解放されるや否や、田の前に立つ男に詰め寄  
る。

「これなり何するんですか……めっちゃ痛いんですけど」

すると、その男は慌てる風もなく、あたしをじっと睨つめ、やはり  
笑いを浮かべながら口を開いた。

「ああ、なんせそのたんこぶめがけて渾身の力で指をはじいたから  
な。痛いのは当たり前だろ？」「こじめっこですか、あなたいい年して……」

いや、本当に痛かったんだから……その証拠に、さつきまでは田立  
たないほどだったのに、今はぱくぱく崩れているではないか。だつ  
て触つたらぼうけとしているもん。

「あ、一応お前もちくちくりんの身の上とはいえ、女なんだからも  
うちゅうと色氣のある声出せよ」

「色氣も何もあんな強烈な攻撃喰らひついてるときにそんな声出せるか  
！？つてこりがちんちくりんは大きなお世話だ……」

確かにあたしは背も小さいし、胸も、まあ、あれだし、色々あれだ  
けども……んなもん、あたしのせいじゃないし。放つといてくれ。

あたしはまきつと睨みつけるけど、この男は全く堪えないようで。余裕の表情でかわすと、懐から取り出したタバコに、優雅に火を付けた。

そしておもむろに、床に転がっている覆面野郎ズに目をやった。

「しかしあいつらも軟弱だな。手足縛った女にのされるとは。……こりやあ意識戻つたら一から鍛えなおしだな」

「簡単に倒してくれましたけど」

「ふん、あれでも俺の手駒の中では強い方なんだがな」

手駒。と、こいつことは。やつぱりこの男はあいつらと同じ仲間、つてこいつよつ上司、主人。つまり。

「……あたしをここに連れてきたのは、あなたの指示ですか？」

すると彼はあつさり認めた。

「ああ、そうだ。俺があいつらに命じてお前をここまで運ばせた」

そいつ言つて煙を天井に向かつて吐きだす。

意味が分からぬ。どうこいつこと？あたしはこの男とは面識がない。こんな凶悪なやつ、知り合いにいる訳がない。ま、分からいことは直接本人に聞くのが早いだらう。

本当はこの男を倒してさうあと外に逃げ出すのがいいんだろうけど。実はさつきから逃げ出す氣配を窺つてはいるんだけど、この男、実に隙がない。

こんな一見飄々としてタバコなんて吸つてゐるのに、だ。ならば時間稼ぎに隙ができるまで、話を聞くのも悪くない。それに、理由もわからぬままつていいうのは寝覚めが悪い。

「一体、なんの理由があつてですか？」

あたしはそつと、後ろ手に隠した刀の鞘に手をかける。もちろん、いつでも切りかかるるようだ。

が。男はそこでまた、にやりと笑つた。

「んなもん、おお前を試したかったからに決まつてんだう？テヌタロッサ」

「ど、どうしてあたしの名前」

「それから、後ろに隠してある刀で切りかかつても無駄だからな。お前の行動は全てお見通しだ」

「！？」

なんで、それを知つてゐる？そつちからあたしの後ろなんて見えないはずだし、音にも細心の注意を払つてたのに。

「なんで、つて顔だな。まったく分かりやすい。他にも？色々知つてる。例えば、その刀はお前の亡くなつた両親の形見だつてこととか、それが両親の命を救つたとか」

あり得ない。だって、その話を知つてるのは、近所に住む若干ボケが進んでるおばあちゃん他数人だけ。その中にこの男の顔はない。だからそもそも見覚えのない顔だし。

じゃあ彼らから話を聞いたってこと？

いやいや、だからといつてこままでされる覚えはない。こつなりやあ、逃げ出すとかそれよりも、はつきりしないといけない。

あたしは隠していた鞘から堂々と刃を抜くと、男の前で構える。ばれてしまつた以上隠しとく意味もない。それにここまでいたら、隙ができるのを待つとくなんて悠長なこと、言つてられない。

「あなた、一体誰なんですか？それに試したかったって意味が分からぬんですけど」

「いい度胸だな。この俺様に刀を向けるとは」

「いやだから何様だか殿さまだか分りませんけど、知らないって言つてるでしょう」

「へえ、知らない、ねえ。本当に？」

「しつこいですよ。あなたみたいな性悪そうで偉そうな男、一回会つたら忘れるはずありませんし」

「偉そうは余計だ。俺は正真正銘偉いからな。なんてつたつて、この国の王族だ」

「…………は」

「王族？この男が？こんな悪役みたいな、タバコすぱすぱ吸つてる人が？」

「気付かなくても仕方ねえ。…じゃ、これなら分かるんじやねえの？」

すると男はタバコの火を消すと、一度、顔を下に向けた。今から何が始まるつていうの？あたしはただ、黙つてその様子を見る。

やがてぱっと男が顔をあげた瞬間。

「いそばんは。僕のこと、本当に分からぬの？」

あたしはその顔を、その声を聞いた瞬間、建物中が震撼するような声で絶叫した。

## 拉致された（3）

今にも風にとけそうな纖細で、それでいて柔らかな微笑みをたたえてあたしを見ているお方。

黒い髪が印象的な、國民ならほとんどが知っている程の有名人。

そのくせ病弱だから、滅多に公の場に顔を見せない。

そう、目の前にいたのは、紛れもない本物の、ガルダム国第6王子ゼイル様だったのだ。

彼は虫も殺さぬ優しげな微笑みをたたえ、あたしを見ていた。もはやあたしの頭はパンク寸前だ。

「ななななななな、なんで、ゼイル王子ー？！？！」

「よかつた、ちゃんと知つてくれたんだね。僕あんまりみんなの前に出ないから、顔も知られてないんじゃないかって思つてたんだ」

確かにお顔は滅多に拝めない。だけどなぜあたしが知つてるかと言うと、美形で有名な王子の肖像画やらなんやらが、國中で売られてポスターとして飾られてたりするから。

あれだけ街中で貼り出されてたら嫌でも目につくし、顔も覚えてしまつというもの。ちなみに密かにあたしもファンだったのだ。

そして笑顔で近寄つてくるのは、紛れもなくゼイル王子だ。さつきまでの凶悪で目つきがいつもちやつてた奴の姿はどこにもない。

「あ、あの、その、本当にあなたはゼイル王子、なのですか……？？」

？」

こんなことつてあるのか？あの、鬼畜オーラ満開の男が、いきなりゼイル王子に早変わりって、こままだに信じられない。イリュージョンでも見せられた気分だ。

むしろ、夢だったんじゃないかつて思えてくる。

あたしは思わず王子に駆け寄る。嫌だ、信じたくない……！だつて王子は評判通りすくく美形でかっこよくて、優しくて、少し纖細で……つて夢持つてたのに！

いや、何かの間違いだよね！？

すると彼は神々しいまでの王族スマイルであたしを見ると笑みを絶やさないままこいつ言った。

「ああ、だからやつだって言つてるだろ？が。あんまりしつこいミンチにするやつ！」

脱兎の「」とあたしは素早く王子から離れる。この男、いや王子、そんな王子の顔でさうつと怖いことをおっしゃる。

……間違いない、この方は紛れもなくゼイル王子だ。

だけど言われてみれば、バーツは全て同じなのだ。

髪の色、瞳の色、鼻、唇、輪郭も。どうして気が付かなかつたんだら。

それだけ雰囲気ががらりと違つてゐることだ。気付かなくても無

理はない、と思つ。

「とこりうか、なんだこの状況。もつあたしは何がなんだかよくわからなくなってきたぞ。つまり、あたしをさらつたのはこのゼイル王子の差し金つてわけだ。」

「とこりうことは、じいさまもしかしてお城、ですか？」

「この人が王子で、調度品とか部屋の感じからして高級感がそこはかとなく漂う辺り、その辺の場所じゃないことは確か。すると王子は首を縦に振った。

「俺の部屋だ」

「……」

あたしはもう考えるのも邪魔くさくなり、つていうか色々ショックすぎて思わず床へたり込む。

「それで、結局なんであたしをここに連れて來たんですか？」

とにかく理由を聞かないとい始まらない。

あたしは王子にさう尋ねる。もつじうでもなれって感じ。何が来ても驚かない自信はある。すると王子はもとの凶悪顔に戻ると、にやりと笑つた。

「单刀直入に言つ。お前を『狂犬』に引き抜くために、ここまで連れてきた」

## 麗しの第6王子様

あの、恐怖の誘拐事件からもう一年。

あたしはゼイル王子に言われるがまま、狂犬の一員として日々を過ごしていた。

『狂犬』。

狂犬とは王様から直接指示を受け、秘密裏に王の命に従う、直属の秘密組織だ。

彼らの主な仕事は、警察でも解決できなかつた未解決事件や、彼らが踏み込めない範囲まで手を広げ捜査を進めること。

そもそも、警察は事件の解決のために色々調査をするのだが、時折上からの圧力というものがかかるらしい。特に大貴族が関わつたり、王族の者が関係していると事の露呈を恐れたお偉いさん方が、それ以上捜査が進まないようににらみを利かせてくるのだそうだ。

刃向ればその者は潰され、場合によつては存在を消される。だからそれは未解決事件として扱われ、闇に葬られる。

そんな時に現れるのが、狂犬だ。

彼らはあらゆる非合法な手段を使って事件を調査し、秘密裏に関係者たちを始末し事件を解決するという恐るべき集団だという。

その存在は一切が謎に包まれており、本当に存在しているのかも定かではない。ガルダム王国の「不思議として語られる存在なのだ。

ちなみになぜ狂犬と呼ばれるかというと、彼らは手段を選ばず、時に犯罪まがいなことを犯してまで罪を暴く。それも徹底的にだ。彼らの目にかかるて逃れたものではなく、その執拗なまでの追いかけつぶりから、絶対に逃げられないもの、という意味で名付けられたらしい。

組織形態、人数、手段、全てが謎。もちろん国王はその存在を否定してるし、誰も見たことがないから表向きには伝説だ。

そんな生きる伝説の現在のボスであるわが主は今、ゼイル王子の仮面をかぶつて「婦人を接客中である。

「それにしてもゼイル王子はなんて美しいのかしらーー！」

頭をこれでもかつて言つほど、無数の宝石と羽で天井に向かつて「デコレーションし、顔はしわを埋めるほどの厚塗りの白粉、唇には毒々しい紅色の輪郭を描き、肩の凝りそくなごむての総レースのピングドレスを年甲斐もなく見せつける女性。

彼の有名な10大貴族スネイク家の奥方、アパネル様その人である。

彼女は弱弱しい笑顔を見せる、外見は純粋、内面はどうどうまつくりすすまみれのゼイル王子にすっかり骨抜きにされたらしく、愛おしそうな目で彼の頬を撫でた。

「こんなにも美しいのにお身体が弱いだなんて。神様はいたずらだわ。あいたわしいですわゼイル王子」

「そんな、僕なんて…。アパネル様こそ、まぶしいほどの美しさです。その美しさに田が思わずくらんでしまいます」

目がくらむのは事実だ。つていつかあまりに痛々しすぎて直視できないってのが本音だらう。

「ううして夫人が僕のために、わざわざ貴重なお時間を割いてまで見舞いに来て頂いただけでも、僕の体は喜びに胸が震える思いです」「まあ！！！」

子犬のような潤んだ瞳で、下から見つめる王子にやられてしまったのか、もう少女のような表情でぱーっと夫人は見つめる。

あたしの方はといふと、あまりの臭い芝居っぷりに直視できず、思わず目を背ける。

だつてそうでしょう。誰が腹黒鬼畜王子（顔はいいが）と熟年厚化粧少女趣味貴族との生ぬるいラブシーンを見せられて喜ぶものか。

その間にも2人のラブシーンは進行していた。「うん、いや、あたしは何も聞こえない、何も見ていない、絶対にー！」

とりあえず、それから10分ほど寒いシーンが続いたようであたしはその間ずっと窓の外を見ていた）、ようやく夫人が重い腰をあげた。

「では王子、私はそろそろ参りますわ」

「ええ、名残惜しいですが…。また是非いらしてください。体調が万全でしたら、今度はもっとたくさんお話しましょう」

そしてどどめどばかりに、王子ははにかむよつた笑顔でこりほほ笑んだ。

夫人はくらりと体をよろめかすと、そのままの状態で部屋から去った。

そして人の気配が完全に消えた次の瞬間。

「つたく、俺は暇じゃねえんだよ」

あたしのとつても見慣れたゼイル魔王閣下に戻られたご主人様は、苛立たしげにタバコを取り出すと火を付けた。

「病弱な薄幸の美青年の王子の役も、乐じやねえな」

「そしてそんな見かけ倒しのゼイル王子と往年の女性との愛のシーンを見せられる従者の方も、精神的に樂じやありませんけど」

「お前は別にいいだろうが。だつて だろ? 精神的苦痛も肉体的苦痛も全て快樂に変えるつていう…」

「人を勝手にそんなキャラに位置付けないでください…!…!…」

はあ。なんであたしはこんな男の下についてるんだ? 今更ながら謎だ。

## 麗しの狂犬王子様

ガルダム王国第6王子ゼイルといえば、病弱で優げ、そして世にも美しい纖細な王子として有名だ。

漆黒の髪はどこか愁いを帯び、鳶色で切れ長の瞳はどことなく哀愁を漂わせ。病氣にも負けないその健気さからくる笑顔に、女性たちはみな虜だ。だがその体の弱さゆえ、滅多に国政には顔を見せず、国民の間では麗しの幻影王子ともてはやされてくる。

が。本来の彼の姿は、こっちなのだ。病弱な第6王子は仮のお姿。裏の顔は最強の名を持つ狂犬のボスだ。

さつきまでの可憐な姿とは一変。纏っていた淡い月光のような優しさ身をひそめ、ドラマヒールな笑みを浮かべながら愛用のタバコを吸いまくり、凶悪な目つきで鋭く相手を見つめ、徹底的に獲物（犯人）を追い詰める。

そして味方を川に突き落とす「ことすら厭わない、最凶最悪の魔王みたいな男…。

それがあたしの主、ゼイル王子の本性である。

あの日、じに連れ去られた私はこのヤーイ王子のお眼鏡にかなつたらしい。

どうやら、街で出会ったチンピラ達を成敗していた場面をじぞでたまたま見かけて、で、それからあたしのことを調べ上げて、実際実力をためしてみようということで部下に襲わせて、なんて物騒な事しかけてきたみたいなんだけど。

そのまま私は王子と無理やり雇用契約を結ばされた。

だつて断れば国家への反逆者としてみなす、なんて恐ろしいこと言ってくるんだよ、この人！狂犬の秘密を知られた以上、生かしてはおけないって。自分でペラペラしゃべってきたくせに！

私もまだ10代で死にたくないの、この契約を結んだ。

まあこの仕事、さすがは直属の機関だけあって、給料は半端なくいい。

王都に来たものの、日雇いの仕事しかなかつたから（腕には自信があつたのに、女だからってどこも雇つてくれなかつたのだ…）、日々の生活の心配をしなくて済むのはありがたいことだけど。

ただ、休みがあんまりとれないと、王子の侍女として働くつづいて精神的苦痛が伴つのはいかがなものかと。特に後者。

なんであたしなんだ。もつと他の、可愛い子とかのほうがよくないですか？自分の侍女は、つてこの前聞いたんだけど、ゼイル王子は首を横に振つた。

自分に夢持つてる女の子の夢を壊すなんて、僕にはできない……！なんてほざいてたけど。確かに。

まさかあのゼイル王子がこんな凶悪王子だなんて知った日には、みんなショックで卒倒するんじゃなかろうか。あたしだつて相当ショックだつたんだから。

はつきり言つて傷ついたあたしの心の慰謝料も払つてほしごへり

だよーこのペテン王子めーじとーつと見てると、視線に気付いた王子が女の子を蕩けさせる極上のスマイルでにっこりほほ笑んだ。

「どうしたのかな、テスタークサ。そんなに僕のこ見つめてきて」「いやいや見つめないです氣のせいです」

う、やばいと思つた時にはもう遅かった。そのうつとつせせる笑顔を一瞬たりとも崩さずに、あたしの方へ歩み寄つてくる。本性を知つてゐからこゝで、余計に怖い怖い怖い…。

しかも、普段はテスタークサなんて呼びにくいかりトイ、って呼ぶのこ、ここであえてテスタークサ呼び。正直嫌な予感しかしない。

氣付けば壁際に押しやられてた。やっぱ、逃げ道がない。

「あの、なんでこんな近くに来るんですか！？」

「だつて、君が何か言いたそうな顔をしていたから。ほら、部下の話をきちんと聞くのも上回りとしての役目でしょ？」

にしたつて近づいてーなにこの距離！文字通り田と鼻の先ーこれが出会い前の王子だったらドキドキするけど、今は別の意味でドキドキだよー背中に冷や汗が流れる。

「…もしも今、誰かが入ってきてこの場面を見られたら、どうなると悪いか？」

急に腰にくるバリトン声で、耳元で囁かれ、恐怖で思わずへたり込みそうになる。

「ひつー..」

が、主は許してくれない。がしつと腕を掴むと、壁にあたしの体を固定し、艶やかな笑顔を浮かべた。

「城中に、俺付きの侍女とそういう関係になつてると知れ渡る。話を聞いた貴族の娘や女たちが、お前にビラリと対応をするか……。想像に難くない」

王子は『自分の人気ぶりをそりやあもうよく』存じだ。間違いない、  
そうなればあたしは王子に虜になつてゐる全てのお姉さま方にハヅラ  
れ…つていうかそれ以上の危険が…！－

だめだ、想像しただけで血の気がよだつ。女の方が陰湿なのだ、嫌がらせの類と言うのは。ただでさえ、ぼうとでのあたしがいきなりゼイル王子の侍女になつて、仲間からは冷たい待遇されてるのに、これ以上針のむしろになるのはまっぴらごめんだ。

しかもそういうことになつたからと聞いて、この王子があたしを侍女業務から解放する訳がない。むしろいたぶられたあたしを間近に見ながら楽しむタイプだ。

「で？今お前、何を考えてた？」

「…………いいえ、王子はとても素晴らしいくて素敵だなああああと見惚れおりましたあーー！」

心の中で思つのも許してくれないのか」の声はあ……  
あたしの答えを聞くと、王子は満足気に頷き、よつやかにあたしは解  
放された。

ふう、命拾いした。

正直、本性丸出しのチンピラ姿よりも、王子の仮面をかぶったキラキラスマイルで来られる方が余程心臓に悪い。

## 狂犬王子の片腕王子（一）

あたしをいたぶつて満足したのか、王子は元の悪人顔に戻ると再びタバコに火をつける。

どうでもいいけどこの人、吸いすぎだよ。一日20本はいつてる気がする。

「ところで伯爵に薬を売った黒幕つてまだ見つかってないんですよね？」

「ああ、あの変態野郎も、詳しく述べ知らないらしい。実際に取引したのは下っ端の奴みたいだし、…王様にはああ言つたが、実際のところ時間はかかるだろ？』

ちなみに、今あたしたち狂犬の抱えている仕事は、『麻薬捜査』。

ガルダム国内では今、これが大流行しているのだ。通称『白い悪魔』。これを摂取すると、なにかが異常に分泌されて、疲れにくくなつて寝なくとも大丈夫になるらしい。気分もハイになって、その、性的快楽を感じやすくなる。

あまりにもその被害が拡大していく、止めようにも止められない状況。とにかくそれを持ち込んだ黒幕を捕まえないことには被害はおさまらない。

で、調べていつた先にあの、変態伯爵の名前が挙がつて来たのだ。彼はいわゆる「売人」の方。

伯爵家は借金を抱えていて生活に苦労していたはずなのに、いつの

まにか綺麗さっぱり完済、それどころか家を増改築して羽振りのいい生活をしてたんだとか。

そのあまりの変貌ぶりを不審に思つて調査したら、『ひつじがいる』から手にした薬を売りさばくことで資金を調達していたと。

でもまあ、ト王子は言葉を切ると、

「今リュークに調べさせたるから、もつ少し時間がかけられるなら 迫れるだろ?」

リューク、とは、狂犬のメンバーで、主に情報収集の方面で活躍している。その能力はピカイチで、ゼイル王子が最も信頼するメンバーの一人だとか。それはそうだろうさ。生まれたときからの付き合いで、お互いにお互いをよく分かりあえてるらしいし。 実際2人はめちゃめちゃ仲がいい。

その時。

扉がノックされる音がした。

「ゼイル、『機嫌はいかが?』

穏やかなその声に、あたしはすぐに扉を開けに走る。この声は…

果たして。目の前にいたのは、やつぱり予想通りのお方だった。

「ティちゃん、こんにちわ」

一寸の曇りもない爽やかな笑顔をあたしに向けたのは、この國の第

7王子。

輝かしい金色の髪と暖かみのあるオレンジの澄んだ瞳、見た人を虜にさせる太陽のような笑顔を浮かべたこの方。

「リューート王子……」

今までに話に出てきた御仁の姿がそこにはあった。

確かにこの仕事は辛いけど、その中には少しあとした楽しみと言つて息抜きもあって。

それが、リューート王子に会えること。

彼もこの国ではとても有名なお方。

第7王子リューク様と言えば、第6王子であるゼイル様と同じぐらい、婦女子たちから人気が高い。

リューク王子は、例えるなら太陽のような存在。ぱっと周りを明るくさせる笑顔と全てを包んでくれそうなオーラを持っていて、おまけにこれまで美形。

なんだけど、すこく人懐っこくて、大柄な方なのにその言動や仕草が可愛らしい。

ゼイル様が、まさしく黒い狂犬だとしたら、リューク王子は大型犬。イメージは「ゴールデンレトリバー」。

しかもすごく優しくて、お城の侍女や兵士たちにも気安く声をかけてくださる。もちろん、あたしにも。会話してるとなんか和むんだよなあ。普段處女としているからかもしねりないから、余計に。

「これ、よかつたら食べて」

やつぱり差し戻されたのは、なぜか食べじゆ色に染まつたみかん。

「えつと、その、どうされたんですか？」

「母さんの実家の庭の木になつてたから。おこしそうだし、ティーチャーも喜ぶかなあつて」

やつぱり嬉しがって笑う王子に、あたしの胸はますますとなる。

何この王子、あたしよつも年上だとは思えないと、可愛いくんですけど！？

「わらわらん嬉しこですょーーーあつがとうござれこますーーー！」

あたしは嬉々として受け取ると、なるべく濡れないように注意してポケットにしまへ。あとで食べよう。

「おこ、俺より先にトライ手土産やるなんて、い一度胸してんなお前」

背後から飛んできたのは、作ってない主人様の声。わらわらんリコート王子は驚かない。長年の付き合いなので、ゼイル王子の本性はずいぶん前からお見通しなのだ。

「わつやあ可愛い女子からプレゼントをあげるのが、紳士としては常識でしょーっ！」

か、可愛いつて……お世辞だつて分かつても、こんな素敵王子に言われたら照れる……恥ずかしい……しかもリコート様はゼイル

様と違つて裏の性格とか本性とかないから余計に！

「で、俺の分は？」

「ゼイルにはないよ。これはティーチちゃんへのお土産なんだから」

そう言つてから、煙をふかしているゼイル王子を見て片眉をひそめる。

「またそんなもの吸つて！あんまり吸いすぎると、肺が真っ黒になつて、将来病気になる可能性が高いんだから！何回言つてもゼイルは聞かないよね」

「別にいいだろ？ どうせ表向きは俺、病気がちなんだし」

「実際はぴんぴんした健康体でしょう？ いいかい、君のためを思つて言つてるんだから。」

後で後悔したつて遅いんだし」

「会う度に小言ばかり言いやがつて。お前は俺の母親か」

「いいえ、僕は君の弟です」

威張るセリフでもないのに、なぜか胸を張つて誇らしげに答えるリコート様。

さすがのゼイル王子も、第7王子には敵わないらしい。しぶしぶつけたばかりの火を消す羽目になる。

ここには他にも何人もの王子王女の方々がいるんだけど、ここまでゼイル王子が親密な関係を築いているのはリコート様だけだ。つて、そもそもゼイル様の裏の顔と本性を知つてゐるのも、リコート様と後は、王様ぐらい。

確かに、ゼイル様が毒氣を抜かれるのも分かる。そういう魅力が

リュート様にはあるもんね。

## 狂犬王子の片腕王子（2）

「あ、みかんはないけど…君へのお土産は、」  
そう言つて、リューート王子はゼイル様の方へ歩いていく。手にして  
るのは白い紙。

「さすがの僕も、ちょっと手にずっといてね。黒幕まで辿り着けて  
はいないんだけど…」

ゼイル王子はそれを受け取ると、険しい顔つきでざつと手を通す。

それにしても、まさかリューク王子まで狂犬のメンバーだったって  
いつにはびっくりした。その外見からは、そんな凶暴な裏組織に入つて  
いるよつこは見えないから。

でも人のよさそなこの王子、実はかなりのやり手。

そもそもこの麻薬事件は、国家警察が追つていたヤマだった。捜査  
するうちにドミニク・伯爵が絡んでるつていうことは分かつたんだけど、相手はお貴族様。やっぱりというべきか、謎の圧力がかかって  
捜査が打ち切りになつたそ。

困つた国家警察のトップが、その旨を王様に伝えて、あたしたち狂  
犬の担当になつた。

それからあたしたちはその日の午後に早速伯爵家に殴りこみ、証拠  
品を見つけ、彼を尋問。で、今日がその尋問から3日目なんだけど  
…。

警察も、ドミニンゴ伯爵の名前までしか分からなかつたといつて、「元のリコート王子、わずか3日で他にも関係してそうな貴族様達の名前を調べ上げた。

今ゼイル王子が手にしているのが、その方々の名前の載つたリスト。横目で盗み見ると、他にも色々な事が書いてあるし。各家の総資産、負債額、それらの返済日、その後の状況などなど…。

よく短期間で調べられたなってぐらい。しかもリコート王子、狂犬以外にも政務を抱えていてそれなりに忙しいはずなのに、そつちもきちんとこなしつつ、らしいから。

見た目はこんな、おつきにワンちゃんみたいな方なのに、迅速に膨大な仕事量をこなせるのはさすがは狂犬のナンバー2と言つべきか。

「ドミニンゴ伯爵の他にも、ソングルク伯爵に『ゴードン伯爵、それに名だたる貴族の名前も…。』といつもこいつも、借金で首が回らなくなつたやつらばかりだな。これだけの相手を手玉に取るやつらか。どうやら背後の黒幕はかなり大きいものと考えていいだろ?」

「それで一番怪しいのは、一番上に名前のあるゴードン伯爵かな。彼のところが、一番初めに借金を完済して羽振りが良くなつたみたいだし。それに、ドミニンゴ氏もゴードンの紹介で始めたと証言してる。他の貴族たちにも尋問をかけてるけど、彼らも同様にゴードンの名前を挙げてる」

「ゴードンか。かなりの大物だな。接触はあつたのか?麻薬商人とは」

「3日間付きつきりで尾行してたけどさっぱり」

だけど、そう言葉を切ると、リコート王子の手には新たな書類の束

が。

あれ、一体どこから出したんだろう。だつてさつきまで何も持つてなかつたよね？

あたしの心のツッコミをよそに、ゼイル王子は特に何も言わずそれを受け取る。

そりですよね、今はそんな話する状況じゃないですもんね。

「それは彼が個人的に親しくしてゐる、商人の名前。この中には密売の斡旋者がいるはず」

「なるほどな、それならゴードンが麻薬密売貴族の草分け的存在でも納得できる」

…何がなるほどなんだろう。2人の中では点と点が線につながつてゐる状況なんだろうけど、あたしは正直意味不明。点と点が空間の中でぼつんと浮いてゐる。

「ゴードン伯爵と仲のいい商人の中に、なんで麻薬密売に関係している人がいるって分かるの？」

それに、それなら伯爵が麻薬密売の貴族の第一人者っていうのも納得できる、って、どういふことですかい？？？

あたしがない頭を必死に絞つてると、王子たちの声が飛んできた。

「ティちゃんが、すごく面白い顔になつてるね

「……お前はほんとに顔に出る女だな」

「え、出でます？顔に？」

全く分かりませんって？だつて実際分かんないんだもん。

別にあたしが分からなくたつて、狂犬の1・2が分かつてればそれでいいとは思うんだけどさ。

同じ空間にいながら除け者にされてるみたいで悲しい。いや、自分が話についてけないおバカだつて認めるのが悔しいだけかもしけなidego。

あたしがそりゃあもう分からないので教えてください的な目を2人に向けると、一人は頭を抱えた。

はい、そうですよねえ。めんどくせそうな顔を目撃した瞬間から、ゼイル様にお教えいただけるとは期待しておりませんでしたが。

ので、もう一人の方をじっと見る。この方は先の御仁と違つて心が広いので、教えてくれるみたいだ。

わあい、さすがリュート王子。

ゼイル様と血が繋がつてるのは思えないほど、お優しい。

## リュート王子の解説

「えつと、そうだなあ。まずは、「ゴーデン伯爵は知ってる?」

初步的な御質問。

答えはイエス。もちろん知っていますとも。

「ゴーデン伯爵家は、ガルダム王国の10大貴族の一つ。建国当初からの歴史をもつ、非常に尊き」貴族様だ。

「最近そのゴーデン家が、没落するかもって噂があつたんだけど」

それも知つてゐる。もちろんただの噂。事業に失敗して、多額の負債を抱えたらしい。屋敷も土地も、全て売り払わないといけないかも、と伯爵家の「婦人が嘆いていたとかいないとか。

「ところがある時を境に、噂がぴたりと止まった。代わりに聞こえてきたのは、どうやら伯爵家のとある事業が成功して、一財を築いたらしいという話」

「それが、王子たちの中では麻薬密売だと?」

「うん、そう。伯爵も、事業の内容をはつきりとは言わなかつたし、流行り出した時期も同時期だからつじつまは合つ」

ただ、と、そこでリュート王子は言葉を言いあぐねた様子で困ったような表情をしてみせた。

「くじと首をかしげた様子が可愛らしい。」

…つていかんいかん。今は大事な説明を受けている最中。しつかりと聞くことに集中しないとあたし！

「何か問題があるんですか？」

「…伯爵家は10大貴族つて言つたでしょ？彼らは貴族の中でも特に貴族らしい体質なんだ。金儲けは好きだけど、性格は極めて慎重。危ない橋は極力渡らない。はつきりとした見返りがない限り。そんな貴族体質のゴードン氏が、一体どうして危ない橋を渡ろうと思つたのか。そこが引っかかるでね」

「借金を返すため、では弱いんですか？」

「調べてみたら、確かに負債は抱えてたけど、大した額じゃなかつた。多少は色々手放さないといけなかつたにしろ、ね」

うーん。そつか。

もし麻薬密売がばれたら、ゴードンの名前は地に落ちる。今までこの国で築き上げてきた全てが無に帰る。だったらそこまで危険を冒さなくとも、借金は返せるのなら別にそんなものに手を出さない方が安全。

「ここまでは分かる？」

「はい、分かります先生！」

小さい子に聞くように尋ねてきた王子に、あたしは理解してることを示すべく元気よく返事してみた。

するとリュート先生はこつこつ。

「それじゃあティちゃんに問題。そんな慎重気質の伯爵が、もし麻薬に手を出すとしたら、どんな理由が考えられると思う？」

うーんと、見返りが期待できなければ危ないことはしたくない、でもお金儲けは好き。

つまり、見返りさえきつちりしてれば危険でもお金儲けに手は出す？

「麻薬の密売をすると、確実にきちんとお金が入つてくると分かればやるってことですか？」

「うん、その通り。ここまで分かれば次の説明で分かるかな？『ゴードン伯爵といえば、貴族の中でも生粋の貴族だよね。だから、いきなり見ず知らずの人に『麻薬売つてお金儲けしませんか？』なんて言われても手を出さないとと思うんだ。慎重な性格だもん。でも、逆にすごく顔見知りで、麻薬密売のうまいやり方を知ってる人間に勧められたらどうなると思う？』

よく知る人物。

…あたしに置き換えてみよう。

例えばあたしがお金に困つてて、何か仕事を探してた時、知らない人にいきなり『短期間高収入』のバイトを勧められたのと、リュート王子に『短期間高収入』のバイトを勧められたのと。

前者は絶対引く。怪しいし、危険な気がするもん！でももしも後者なら、あたしはあまり迷わず選ぶと思う。だって信頼してる人がそう言つなら、きっと大丈夫だつて考えて…あつ！そつか、そういうこと…？

「知り合いなら全然あります！…」

「そうだよね。僕らもそう考えたから、ゴードンの知り合いの中に、

そういうルートに詳しそうな人間を調べたんだ。それならおそらく商人に絞られるんじゃないかと。それでピックアップした結果、怪しげな商人が3組ほど出てきたってこと

なるほど…。で、先のゼイル王子の言葉につながる訳か。

「分かりました」

「うん、ティちゃん偉いぞ」

そう満足気に頷くと、王子はあたしの頭をよしよしと撫でてくれた。なんか本当に幼子みたいで恥ずかしい気がするけど、妙に満ち足りた気持ちになるからいいか。

## 進展への一筋の光

すると今まですっかり蚊帳の外に自分から行つてた主が、撫でてもらつてゐる傍からあたしの頭をべしんと叩いた。

「お前脳みそつまつてんのか？軽くていい音出しあがつて」

「んあ、痛い…。つていうかあたしは普通です！全然伯爵の状況とかその他もろもろ知らないのに、いきなり分かる方が無理あります！それに説明聞いたらあたしだって分かるんですから！別にそこまでおバカじやありませんよーだ」

「開き直りやがつて…。おいリューート、ここつをあんまり甘やかすなよ」

「いいじやないかゼイル。君が120%鞭な分、誰かが代わりに飴をあげないと」

「そうだよその通りだよーあたしだって優しくされたお年頃なんだからー」

リューート王子の言葉に、心当たりがあるのか、ゼイル様はなんとも言えない様子でちつと舌打ちをすると、部屋のソファに戻り、ハッタリ氣味に手にした書類に火をつけ、一瞬で灰に変える。

もちろん本当に感情の赴くままそんなことをした訳ではなく、文字にして残しておぐことは危険、ところとらしい。

「それでどの商人が関わってるのかは分からなかつたのか」「うん、ごめん。時間をかければ分かるとは思うけど…」

「そうだ、まだ3日だ。」

だかど、 ゃうゝ田。

あたしたち狂犬が関わった事件は、ほんとが凶悪なものばかり。放つておいたらますます事態は悪くなる。だからこつも解決までは、長くても1週間。

今回の事件だつてやう。

時間をかけねばますます麻薬汚染は広がつてこべ。

悲しそうな田でしょんとしたコート王太子を見て、あたしは思わず、耳をしゅんとしかめたワンちゃんを憇て呟いた。

う、めりひや撫でたこー。わつわみたいに頭を撫でられるのもういこかど、やつぱつあたしの中コート王太子は撫でたい派。

だけどコート王太子は伸びやかヒト姿勢を止め、やや呟く口調で答えた。

「ただ一つ朗報が。『一ダントン伯爵なんだかど、最近は荒稼ぎしたお金であるといふに頻繁に通つてゐるんだ』

「あぬどひやへ..」

ゼイル王太子の言葉に、レーベンと領へコート様。

「花街の売れつ子、ラピス嬢に、元の相手貢いでござる」

その瞬間、もともと明るくないゼイル王太子の瞳が、若干ほの暗いこと染められた、気がする。

だけどあたしはおなじみのその名前で、すっかりテンションが上がってしまった。

「ラピス様ですか！？あの？」

「そうだよ、君たちのよく知るラピス・ミーヤン。彼女なら、何か聞いてるかもしないだろ？？その商人に関する情報をさ」

それって、もしかしてもしかしなくても大きな進展が見えるんじやないだろ？？

期待に満ちた目でゼイル王子を見つめると、やっぱり氣のせいやない。主はとても嫌そう。

まあ分かりますけど。だってこの2人、なぜか仲が悪いし。

でもそんなこと言ってる場合ではないのは、ゼイル王子自身が一番よくお分かりのはず。

はあっとメガトン級の重たいため息をつくと、主は重たい腰を上げるかのよにゆっくりと立ち上がる。

「それじゃあそっちは俺がなんとかする」

「分かった。じゃあ僕は他の貴族たちについで少しだけ調べてみるよ」「頼む」

それからりゅうぱりテンションの上がらない声で、主があたしの名を呼んだ。

「ティイ」

はこはいなんじょうか、マイマスター。

ルンルン気分であたしが駆け寄ると、王子はこきなりほっぺたをつねつてきた。

「ひやひひゅひゅんひえひゅひや

何するんだすか つて書つたつもりだけど、書いてないし。いや本当に何するんだこの人！－

「お前が嬉しそうなのがいらっしゃるとしてな」

それ、完全に八つ当たりじゃないですか！？

それから途端にぱっと手を離すと、嫌々オーラ全開にしながらも、出かける用意をあたしに命じたのだった。

## 花街の売れっ子（1）

王都ベイリンの東側。

街の北側に構えるお城からは、歩いて割と田と鼻の先に、その場所はあつた。

まだ昼間だつていうのに、色氣つていつか、18禁的なオーラをむんむんと発生させてくるその場所は、『花街』と呼ばれる特殊な空間だ。

よつは、男たちが若くて綺麗なお姉ちゃんたちをお金で買って、めぐるめく官能の世界を体感する大人のアドベンチャーワールド。

そして我が主は、その区画内にあるいくつかの建物には見向きもせずに、目当ての場所へとまっすぐ突き進んでいく。

ええ、うちの『』主人様はもちろん、お金でお姉さま方を買つ、なんてことをしなくともおモテになられるのですが、それでもよく、ここにいる一人のお方に会いに来ているのだ。もちろん名田は、情報収集・調査のため。

やがて辿り着いたのは、花街の中でもひと際存在感を放つ、高級感あふれる一軒のお店。

ゼイル王子は慣れた様子で、臆することなく中へ入つていく。

ちなみに、今の王子は完璧に『ゼイル王子仕様』を封印し、素のままの凶悪オーラ全開。だもんだから、不思議な事に堂々と素顔をさ

らしているにも関わらず、街を歩く人、誰一人この人がゼイル王子だと分からぬ。

それにして、ゼイル王子は王子服を脱いで兵士の服に着替えると、顔を隠すことなく堂々と部屋から出て、そのままお城の正門から出ていくんだもんな。

なんで誰も気づかないのってくらい。

…まあたしも初めて会った時全く気が付かなかつたから人のこと、言えませんが。

今は中に入ると営業時間外なので、当然、お客様は誰もいない。代わりにいたのは、入口に飾つてあつた壺を熱心に磨く女の子。

「あ、ティさんいらっしゃい」

あたしに気付くと、女の子は満面の笑みを浮かべて出迎えてくれた。

花街は、もちろん男の人がある街。だけどあたしはこうしていつも、ゼイル様のお付きよろしくここにも出入りするので、ここで働く人たちとはすっかり顔なじみ。

彼女はスーザンと言つて、幼いころからここで働いている少女。あたしよりも年下で、あどけないけどなんか無性に可愛い。

「今日も相変わらず早いですね、ご主人様は」

「いつもごめんなさい、営業時間外だつていうのに」「いいんですよ! ジージル様はうちの上お得意様だから」

もちろん名前は偽名。

街での王子は、ジージル。ベイリンでも有数の商人の息子で、お金持ちのボンボン、つていう設定。

「ラピス様は今起きたところですから、準備までもう少し御時間かかるかと」

こじが機能するのは、日が暮れてから明け方まで。売れっ子になつたらそれはもう毎日、初めから終わりまで引っ張りだこだから、こんな毎過ぎに起きるのも不思議じやない。

ちらりと主の方を見ると、待合室の白いソファにびっかりと座つこんで本日9本目の一服中。

… 麻薬依存も恐ろしいけど、あの人のニコチン中毒の方があたしは心配だ。

花街、つて初めて聞いた時、田舎から出てきたあたしは正直もっとおどりおどりしこじいろだと思つていた。だけど意外にもそんなことはなくて。

お店にもピンからキリまであるので何とも言えないんだけど、少なぐともこの一画は別格。

相手をするのが、ビジギの貴族やら大商人やら、異国の王子とかなので、じじで働く女の人たちは、様々な教養と芸を叩きこまれる。

運が良ければお金持ちの人と結婚できる可能性もあるので、自ら志願する者も多いんだとか。なり手はある程度教養と知識を身につけ

た、平民以上の出の女の人たち。

もちろん生まれ持つた美貌も素晴らしいし、気品と高潔を持った人が  
すごく多いのも特徴。

そしてそんな花街の女たちのトップに君臨するのが、今日のお田当  
ての人物、ラピス・ミーヤン様。

お相手を務めるのは、名だたる大貴族、王族、金持ちの人々。

彼女を指名しようものなら、一夜にして散在するほどの額だ。それ  
でも男たちは彼女の元へ通う。

「い」田意ができました。どうぞいらっしゃりく

やがて奥から現れたのは、60過ぎの上品な淑女。質のいい淡い黃  
色の布地で作られた、シンプルなドレスを身に纏っている。

昔は一斉を風靡したって言われるほど、花街では伝説の女主人だ。  
年をとつてなお、その美貌は衰えていない。

あたしなんかより、よっぽど色氣もあるし。

彼女に続くゼイル王子の後ろに、あたしも慌てて従つた。

## 花街の売れっ子（2）

いくつかの部屋の前を通り抜け、やがて見えてきたのは上へと続く螺旋の階段。

太陽の光がさんさんと差し込む中、あたしたちはひたすら上を団指す。

結構な長さだった。

いつも思つんだけど、なんでこんなに長いんだってへりこ、とにかく長い。

それだけしんどい思いをしてようやく売れっ子の「ピース嬢」にお皿にかかるるつて訳だ。

ようやく昇りきった先にあったのは、大きな真っ白な両開きの扉。

女主人がその前に立つと、控え目に扉を叩いた。

「ジージル様がお見えです」

すると中から、艶めいた女の声が響いた。

「どうぞお入りになつて」

その声と一緒に、女主人が扉を開いた。

ギギーつていう木のきしむ音と同時にゆっくりと開かれた先には、果てしなく広い部屋。

王子は開かれた扉から、中へと足を進める。もちろんあたしも後に続いた。

「「」」

女主人の言葉と共に、静かに扉が閉められた。

中は外から見ていた以上に広く、どこぞの貴族のお嬢様のお部屋だつていつても遜色がないくらい立派な物。

色は白で統一されていて、落ち着いた雰囲気。しかもなんだか部屋全体が、そこはかとなく甘えていい香りがする。

さて、あたしたちのお目当てのお方は、目の前の天蓋付きお姫様ベッドの前で優雅に立っていた。

その美しさといつたら……！

瑠璃色の艶やかな髪を無造作に胸元に垂らし、艶然と、魅惑的な表情でこちらを見つめている。

氣だるげな雰囲気を漂わせ、緩く体に纏わせた白のドレスは、彼女の体の曲線美を惜しみなく露わにしている。

猫を連想させるやや釣り上りの瞳であたしたちの姿を見やると、彼女は一般的の男たちがいくら積んでも見られない、痺れるような笑顔を向けた。

「テスタロッサ  
「ラピス様！」

あたしは別に女好き、とか、そう言つ趣味はないんだけど。ラピス

様は別。

だつて、ゼイル様やリュート様とはまた別格の美しさだもん！！

初めて会つた時は、同じ女としてあまりにも違はずさて（つて）いかむしろ生物として違うとわえ思つ）、近づくのも畏れ多かつた。だけじしゃべつてみたらすゞく優しくて、あたしはあつといつ間に慕う様になつたのだ。

近づくと、部屋でしているのと同じ匂香りが彼女からもする。  
ああ、いい匂いすぎて頭がくらへりする……。

「会いたかったわ、テスターッサ」

そしてあらうことか、ラピスお姉様はあたしのことをぎゅっと抱きしめた。

あたしよりも背の高い姉様のふくよかな胸が、頭にちょいぱたつて……。

男たち誰もが憧れる花街一の美女の胸に顔をつずめるつていう行為も、あたしからしたらこいつのことだ。

「すみません、仕事が忙しくて……」

なんせあたしの仕事は侍女兼狂犬ですから。

王子の侍女は一日中、合間に狂犬のお仕事が入るもんで。だもんだから、歩いてこられる距離でもなかなか顔が出せないので。

するとラピス様は、今度は自分の顔にあたしの顔をぐつと引き寄せた。

お 、眼がでかい。しかも睫毛ながい。

女のあたしが思わず見惚れちゃつほどどの美貌を惜しげもなく見せつけられて、なんかあたしの心臓がやばいぞ。  
鼓動が速くなる、痛いくらいに。

「てっきり私のことなんて、忘れちゃったのかと思つたわ」

「そ、そんなこと、あり得ませんからーー！」

「おい、いい加減ティから離れる、この女狐が」

「と。ここで不機嫌な声が乱入する。  
もしかりん誰かは分かりきってるけど。

ラピス様はあたしから体を離すと、今、初めて見たかのよつこ  
ゼイル様の方を一瞥する。  
まるで虫けらを見るよつな蔑んだ田。

「あら、いたの」

「最初からな」

急激に、部屋の温度が下がつた気が…いや、『氣のせいじゃない』なんか、2人の間でバチバチ火花が散つてる。  
そのくせ部屋は凍りついたかのように、寒い。

「じゃあテスラロッサを置いて、わざわざお歸りなさご。わよつな

ら。御苦労さま」

「いい度胸じやねえか。この俺の存在を無視するとは

「仕方ないじやない。嫌いなんだからあなた」

「それはお生憎様。俺もお前が気にくわねえ」

……こつもの」と、なんだけど。

この2人、仲が悪い。もつ究極的に。

2人とも笑顔のはずなのに、その笑顔が怖いっていつ……。

間に挟まれたあたしは、素早く部屋の隅に移動しそうとするも、ラピス様に手を引かれ、再び彼女の腕の中に。

「かわいそうに。こんなに愛らしこの子を、休みがないぐらいに酷使するなんて。あなた最低ね」

「俺の従者をどう扱おうが、俺の勝手だらうが」「そういう男の醜い独占欲、吐き気がするわ」「勝手に吐いとけ」

「……ねえ、テスタロッサ。あんな男の下で働くのなんてやめて、私のところに来ない? お休みだってたくさんあるし、可愛がつてあげるわよ」

そつ言いながら、吐息交じりの口調であたしをじっと見つめる。

「ウフ…………! ?」

いや、確かにラピス様は好きだ。あんな腐れ王子の下で酷使されるよりはずっとましだらうし。  
けど、けれどもだ!!

なんかラピス様の下についたら、あたしはもういつかの世界に戻つてこられないような気がするんだけど!!

こう、花街で就職つてことは、将来的にあたし、あんなことやらこんなことするの!!?

この、洗濯板みたいな体で? いやいや、自分が例えぼんきゅっぽんでも、それは嫌だ!

それに……なんでだろ？、あたしを見つめる「ピース様の顔が、心なし  
か恍惚として……ちょ、そんな、いきなり腰を触られてるんですけど  
！！

いつもスキンシップは激しめだけ、今日は特に過激……！…

うわ…………つて目を白黒してたら、今度はぐつと体を後ろに持つ  
てされた。んで、そのまま部屋の端に吊りつけられた。

「んぎゅっ！？！？」

「……おい、お前自分の主人の前で、簡単に誘惑されそうになつてん  
じゃねえぞ」

だからって、そのまま床に投げ飛ばすか、普通！？いや、普通なん  
て言葉、もとよりこのお方には通用しないんだっけ。

あ、お尻ついた。絶対青くなるパターンだよ！これ。

「お前は罰として、あとでたつぱりお仕置きしてやる」「

いやつと、口の端をあざて言い放つた台詞に、あたしは体を震わせ  
る。

「あへへー！？！？お、し、お、あ……ですか！？まさかあれ？あれする  
んですか！？」

## 花街の売れっ子（3）

「それで？今日は何の用かしら？」

恐怖でぶるぶる震えているあたしの横にラピス様がやってきて、あやすように頭を撫でてくれた。あー、やっぱリラピス様の方がいい。

「もちろん、狂犬がらみだ」

そう言つと、ゼイル様はタバコを取り出そうとして…素早くラピス様に叩き落とされた。

「禁煙、だから。」の部屋」

一瞬じろりと王子は睨みつけたけど、何も言わず、黙つて床に落ちたそれを懐にします。

ちなみにラピス様。

この男が実は第6王子だってことも、王直属の秘密組織、狂犬のリーダーだってことも全て知つてる。

かといって、彼女は狂犬のメンバーじゃない。

あたしたちが主にしょっぴくのは、いわゆるお金持ちと呼ばれるブルジョワ層。そんな裕福な相手をしこたま手玉に取つてるラピス様のもたらす情報は、あたしたちの捜査に非常に重要なもの。

そんな訳でこの2人、あたしが狂犬に入る前から情報のやり取りをしているんだそうだ。ちなみに昔から険悪らしい。

王子いわく、魂から相性が合わないと。

それでも彼女の協力は不可欠なので、こうじて出向いていると。ラピス様の方も王子は大っ嫌いだけど協力は惜しまないと言ひ。色々謎が多い関係だ。

「狂犬がらみね。ま、あなたののような野蛮人がわざわざここに来る時なんて、それぐらいしか用事はないでしょ? から。それで、何を聞きたいのかしら?」

「巷ではやつてる白い悪魔、知ってるか?」

「もちろん。この館でもそれを使った女の子がいてこの前死んだわ」「それを主に売りさばいているのが、金に困った貴族達らしい。  
最近ここに出入りしているゴードン侯爵もその一人だが、何か聞いてないか?」

するとラピス様はしばし考えるように眉間にしわを寄せる。悩む姿も色っぽいとか、綺麗な人は何をしててもなんでもありだ。

やがて思い出したかのようにぽんと手を叩いた。

「ああ、あの顔がギトギトした冴えない男ね。確かに最近はよくいらっしゃってるわ」

「そう、その脂ぎったガマガエルみたいなおっさんだ」

「あの男が白い悪魔を売りさばいているかもしね、といふ」と?

「かも、じゃない。確定だ。リュート調べだから間違いない」

「そうねえ……」

そういうと、再び思案顔に戻られるラピス様。

王子いわく、人間は、その、ベッドの中が一番素直になる馬鹿な生

き物なんだと。だから、男たちがペラペラ秘密をラピス様の前で話すことは意外に多いんだとか。

だけど、ラピス様は首をふりふり横に振った。

「残念だけど私は何も聞いてないわ。だつてあの人、あんまりにも生理的に受け付けないから、いつも適当に薬盛つて、朝まで床に転がしどくから」

「えつ！？」

あたしが思わず声を上げると、ラピス様は違つわよ、と前置きする

と、

「ああ、勿論薬は睡眠薬のことよ。そつちではなくて」

いやいや、そこに反応したんじゃなくて！？いやそつちも十分気になつたけど。

それは果たしていいのか？

でも、ラピス様ほどのクラスになると、それもありつて思えてくる。うん、美人は何をしても許されるつて思えるからすこじよね。

「そつか」

ゼイル王子は特にラピス様の返答に何もリアクションせず、それだけ答える。

その表情からは何も読み取れないけど、おそらく心の中では少し落胆してゐるはず。

当てが外れてしまつた以上リューク様調べが頼みの綱になる。だけどそれも、時間がかかりそうだつて言つてた。こつちとしては、そ

れでも一刻も早く黒幕を捕まえたい。

うーん、あと手段として考えられるのは、とにかく怪しいお貴族様達の動向を監視する。それも他の狂犬のメンバーがやっているらしいんだけど、なかなか尻尾がつかめないと。

## 花街の売れっ子（4）

あたしは唇を「ああ」と噛む。

こいつにうつ、役に立てない自分が悔しい。あたしにできるのは武力行使だけ。

頭もそんなよくないし、情報収集なんてもつてのほか。

と。

黙つてあたしたちを見ていたラピス様が、ふっと口を開いた。

「今夜、おやぢらあの男が来ると想つ。その時に聞きだすことぐらいはできるわよ。」

「え」

それつてつまり、ラピス様が生理的嫌悪感を發揮する男と無理やり……つてこと！？！？いやいやいやいや、それはその、いくらラピス様のお仕事がそういう男たちへの夢売り業だとしても、それはどうなの！？いくらなんでも…

「あなた、思つていいことがそのまま顔に出るのね。ふふ、いいのよ。可愛いあなたのためだもの。テスター・ロッサが困る姿なんて、見たくないわ」

そして最後に、断じてゼイルを助けるためではないから、と強く付け加えた。

「で、私は何を聞き出せばいいのかしら」

「伯爵がどいつと取引してブツを手に入れてるか。それが知りたい。

俺たちの予想じゃ、他国と取引のある商人だ」

「いいわ、任せなおいで。だけど……」

セイドーラピス様は言葉を切ると、潤んだ瞳で私を見つめる。

「むちむち、ただつて訳にはいかないけど

そいつと、またまたあたしの側にやってきて、くすりと笑う。少女のよくな無垢で、喜びに満ちあふれた表情。

「こつも報酬やつてるだろ？」「ええ、そうね。だけど今回は違つわ。嫌で仕方がない男と、一晩ベッドの上で共にするのよ？こつもと同じじや割に合わないわ

えつと、つまり、いつもは既に知つてることを教えてくれてるからいこけど、今回は情報を引き出すために協力するんだから上乗せて、つてことだよね？

にしても、一体二つの間に渡してたんだら、報酬。おそらくお金だと思うんだけど、そんな素振り、一緒にこごむときは見なかつたにな。

なんんて考えてると、なんとなく、視線を感じてそっちに目をやると。

ラピス様が、じつとあたしの顔をじ覽になられてて。  
後ろの方で、苦い顔をしてゼイル様があたしを見ていて。

「あれ？」

二人から視線を注がれ混乱すると、ラピス様がするりとわたしの頬を撫でた。白い指がつたう仕草に、思わずわたしはぞくつとす。

え、心なしか、ラピス様の目が怖いんですけどもっー？なにこれ、どういう状況！？

まさかあたし、狙われてる  
！？！？

と思つたのも束の間。なぜかあたしは首根っこを掴まれて、そのまま宙に浮いた態勢で扉の方へ連れて行かれる。んで、そのままぽいっと廊下に捨てられた。

「んなー？」

抗議しようつと声をあげたならば、その男はあたしの方を険しい目つきで見ると、ため息まじりで言葉を投げかけた。

「1時間で戻る。下で待つてろ」

そして目の前で扉はがちゃりと閉められた。おまけに、一瞬に鍵までしつかりと。

「…………」

ん、ん？んん？？？

- 1 ラピス様は、協力する見返りを要求した
- 2 部屋にはゼイル王子が残って、あたしは追い出された
- 3 王子は1時間で戻ると言つた

4・そしてカギのかかった部屋で2人つきり

5・ここは花街である

まさか。。。

しんとした廊下に聞こえてくる、衣ずれの音。

「.....」

と、と、とつあえず、ここにいつまでもいてはいけない気がする。  
あたしはなんとなく本能で察すると、急いで階段を駆け降りた。

## ラピス嬢とゼイル王子

本当に、この男はいけ好かない。何が気に食わないかと言われば、その存在全てが気に入らない。

ベッドに横たわったまま隣を見ると、乱れた髪をかき上げながら、男が苛立たしげに手にしたタバコをくるくる回している。私はこの部屋でタバコを吸われるのが嫌。だからなんだろうけど。

この男とは、もう長い関係だ。私がここにやつて来てから、かれこれ10年来の付き合い。出会ったころはお互いまだ子供で、それでも第一印象から互いに気に食わなかつた。

ここにくる子たちは、あわよくばお金持ちの男を捕まえて…って思う子がほとんど。教養や礼儀も厳しくしつけられるから、花嫁修行の一環として考える子も少なくない。

でも私は違う。

私が好きなのは、女の子。まだ女としての蕾が開く前の、あの初々しい感じ。羞恥で顔を赤らめて、それでも襲う快感の波に抗えず…たまらない。

だから、入つて来たばかりの女の子たちのつまみ食いが私の趣味。

今一番のお気に入りは、あの、テスタロッサ。

小動物みたいな仕草と常に表情がころころ変わる様は、見ていて飽きない。こんな凶悪男の元でも、めげずにいる辺り、根性もあるんだろう。それに…あの子に似てるもの。

私がかつて、人生を懸けて愛した、可愛い可愛い女の子。

そんな子を自分の手で… そう考へると、胸が熱くなる。

だけど、それをこの男は許さない。

私達がお互にお互いを嫌悪する理由。  
それはうるさい、同族嫌悪。

「あなたに頼まれるまでもないわ」「頼んだぞ ラビア」

本当はお願いを聞く代わりにテスタロッサに相手、して欲しかったのに。

この男が身を呈して庇つたから。

いけすかない存在だけど、体の相性はとてもいい。最近は、枯れた男たちの精気しか相手にできなかつたから、若い男の精気も十分私的には満足。

「ふふふ、うわー」

この女とは長い付き合いだ。

初めて出会ったのは、まだ10代も前半。その頃から俺は狂犬として暗躍してたんだが、顔を見た瞬間、この女は全てを見透かしたように戸に笑いながら囁いた。

「素敵なお作り笑顔ね」

完璧な王子の仮面を、一瞬で見抜いたのはラピスだけだ。

別に、だから嫌いになつたとかそういうことじやない。

俺とこの女は似てる。

それが一番の要因だ。

だが、その美貌で花街の頂点に上り詰めたラピスは、狂犬にとつて実に都合がいい情報収集の道具だ。だから、嫌々ながらも女の元に通つた。

俺が狂犬だらうと、王子だらうと、この女には心底どうでもいいらしい。それを口外する心配もない。

情報をねだる代わりに、女は俺自身を要求してきた。もちろん俺もそれに答えた。嫌いな相手だらうが体が反応するのは仕方がない。そういう生き物だから。どうせお互い割りきった関係だ。

ただ、ティが俺の下に就いてからは、そういうのは要求されなくなつた。ティがラピスのお眼鏡になつたらしい。あいつに会わせることが、情報を提供する見返りになつた。

まあ今回はさすがに会うだけじゃ済まされなさそうだったから、テ  
イはさつと退場させたんだが。

「あなたって面白いのね」

ふと、窓際に立ったラピスが、可笑しそうな様子で口にする。

俺は手にしたタバコを回すのをやめ、女に苛立たしげな視線を送る。  
「あなたはなんだかんだ言いながらも本当は彼女のことがとても大  
切。だけど同時に、自分の手で壊してしまいたいとも思つてゐる。矛  
盾してるわよね」

分かつたような口を…そんなことは言わない。女の言つた通りだつ  
たから。代わりに口に出たのは。

「……お前も俺と同じだろ?」

俺はベッドから抜け出ると、床に落ちてた自分の服に袖を通す。そ  
ろそろあいつに指示してた時間だ。

身支度を整え、俺が部屋を出る寸前、女が呼びとめた。

「黒い感情に染まつたらだめよ。人は壊れてしまつたらもう修復は  
できない。壊れたらそれは、もう愛していたその人ではなくなる。  
別にあなたがどうなるうと知つたことではないけど、彼女が壊され  
るのは見たくないわ」

そう言つた女の顔が、少しだけ愁いを帯びてるよう見えた。

「『忠告』、どうも」

俺はそれだけ答えると、そのまま振り向かずに部屋を出た。

大人つて穢れてる…。

あわあわしながら下に戻ると、庭のベンチに座つて、ちょうど休憩中だったのかスーザンがお菓子を頬張りながら本を読んでいるのが見えた。

「あへ、ふおーひふあふお????」

あれ、どうしたの????多分そう言つてる。あたしはそんなスーザンの横に座ると、ラピス様が、我が主の毒牙にかかっている旨を説明した。確かにその、見返り?的なものを要求したのはラピス様だよ?だけど、こいつ、なんか!!!言葉にできないものがこみあげてくるのさ!

「そんなの、ティさんが来る前からずっとだけ」

けれど、スーザンはなんでもないような顔でそう言つてきた。

「え、 そうなの?」

「うん。前からそんな感じだし。…つていうか、私、ここ一年そういうのがなかつたつていう方が不思議だよ。てつきり3人でようじくやつてるもんだと」

「いやあああ

「つ……！」

ようしきつて何!!なんもしてない、あたしは一切穢れてないから……つていうかしょっぱなからそういうハードなのは無理だから!!

全く、あたしよりも年下なはずなのよ、なんてこといつてんだこの子は。

さすがは将来の花街の女、つていうとか。いやほや遅しい。

「ち、ちなみにスーザンはそういうの、まあ、まだ、よね？」

こんな可憐な乙女が、もつすでに実はあれあれなのか…？おそれおそるお口にすると、彼女は花がほこりびぶ呑うに笑った。

「まさか！花街は18にならないとそういうお客様は取れないもの。私はまだ14だから、後4年は修業の身です」

なんかその言葉を聞いて安心する。よかつた。

「…でもジーリル様のその行動つて、ティさんを守つたんじゃない？」

「え、なんで？」

「だつてうちのラピス様、実は無類の女の子好きで有名だもの。ティさんなんてもうドストライクよ？」

……まじでか。なんかいつも妙に距離が近いなあとか、うつとりとした田線を感じたりとか、たわわな胸をおしつけていらっしゃるなあとか、フェロモンむんむんだなあとか思つてたんだけど、それつてそういうこと、だつたのか？

いやいや待てよ。でももしそうだとしても、あのゼイル王子があたしを庇うなんて真似するだろうか？むしろ嫌がるあたしを傍目で見ながら一ヤ一ヤ傍観する方が、ぼくないか？

あ、でも、ラピス様とは仲が悪いから、自分の従者が嫌いな人に黙つて従わされるのは見たくなかった、とか？

うーん、考えても分からない。ならいつそ思考は放棄。

結論。なんにせよ、とにかくゼイタル王子は汚らわしい。

あたしはそういう心の中で締めくくると、田の前のお茶菓子に手を伸ばす。なんやかんやで疲れたので、頭が糖分を欲しているのだ。

「それで1時間は時間つぶさなきゃいけないんだけど、スーザン付き合つてくれない？」

だつて先に帰ると絶対に怒られるし、それはイコールお仕置きとして自分に帰つてくる。既にお仕置きは一つ予約済みなので、これ以上のお被害は避けたいところ。

するとスーザンは、お店が開くまで休憩だから付き合つてあげる、と言つてくれた。

なので、あしたちはお茶菓子を片手にガールズトークで時間を潰すこととした。

とはいっても、相手は仮にも花街の少女。普通の話で終わるはずもなく。かなりディープだ。

「例えば手の技だと……」

「他にもこういった体勢で……」

「後は妊娠について……」

・今だ経験のないことなのに、同じく経験のないはずの女の子の口から淡々と紡がれる内容に、あたしは赤面せずにはいられない。

「それで…って、大丈夫？ テイさん顔が真っ赤だけど」「そりやあそんな話されたら、刺激が強すぎてこうなるって」「ティさんって初心なのねえ。ラピス様がお気に入りになるのも分かるわ」

そう言つてくすりと笑う14歳の少女。

いやいや、あたしは普通です。あなたたちが進み過ぎてるんですけど。しかしこのくらいの年頃の子にもうそういう教育を施すなんて、花街は本当に色々とすごい。あたしの想像の範疇を超えている。宇宙だよ、もつ。

他にも、情操教育の他に、護身術とか毒薬の耐性作りのために幼いころから訓練してると言つ。

つて、そつだ、薬といえば。

あたしはさつわラピス様が言つていたことを思い出した。

ここにも、白い悪魔にやられて死んだ子がいるって。スーザンもここの一員だし、詳しい話が聞けるかな。

「ねえ、スーザン。ちょっと聞きたいことがあるんだけど

あたしはちょっと真面目な顔になると、じつと彼女の方を見る。

「いいに、白い悪魔と呼ばれてる麻薬で死んだ女の子がいるって話を聞いたんだけど」

その途端、今まで朗らかだった彼女の顔が一気に曇った。

## 白い悪魔に囚われた女

「あ、あのね、その、さつきたまたまラピス様に聞いて、それで、今この辺りで白い悪魔が流行ってるから、気をつけないといけないなあつていうか」

沈黙に落ちたスーザンの様子に、あたしは何やらまずいことを聞いたのを肌で感じた。だから慌てて、動搖のあまりその場に立ち上がりながら言い訳みたいなことを並べてたんだけど。

その瞬間、彼女の瞳からぽろりと涙が零れた。

「…？」

スーザンは泣いていた。

声は出さず、必死に歯を食いしばり、溢れだす大量の涙。

：あたしは大馬鹿者だ。考えてみたら、亡くなつたのはここで働く女人の人。そしてこの場所はスーザンが育つた家のようなもの。一緒に住む人たちはみんな家族同然。

それなのにあたしは、無神経にも軽い口調で、仕事の手がかりになればいいなと思う反面、興味本位の気持ちで聞いてしまった。

しかも亡くなつたのはつい最近。悲しみの心の傷が癒えてるとは思えないこんな時に。

最低だ、本当に。自分の愚かさに吐き氣がする。

だけどそんなこと思つてる場合じゃない。

あたしはスーザンの方に向き直ると、一瞬で言わなければならぬ言葉を口にした。

「「じめん、スーザン。あたし無神経だった。スーザンがどんな気持ちになるのかも想像できないで、こんなこと聞くなんて。…本当に、「ごめんなさい」

だけど彼女は気丈にも、そこで涙を手で拭い、それでも顔に笑顔を出して首を横に振った。

「いいえ、ティさんは悪くないです。ただちょっと…思い出しちゃつただけで…」

「思い出せない、「じめん」

あたしはそのまま、無言で彼女の横に座る。

後悔と自責の念で押し潰されそうだ。比喩表現じゃなくて本当に潰れてしまえばいいのに！

しばらく、あたしたちは無言だった。

やがて。

風さえなびかない無音の中で、ぽつりと。スーザンが小さな声で語り出した。

「リーラン姉様は、線は細くて今にも折れそうで。でもしつかりとした意志を持つたお方だつた。ここにいる幼い女の子たちはみんな、姉様になついていた。もちろん私もその一人だつた」

なにかを噛みしめるように、ゆっくりと語るその言葉に、あたしは

黙つて耳を傾ける。

「ある日を境に、姉様に変化が見られたの。いつも綺麗なんだけど、なんだか更に磨きがつかったみたいで。時々外を見てはため息を漏らしたり。なんだか少女のように笑うし、私気になつて聞いてみたの。そしたら姉様、嬉しそうに言つた。『好きな人ができたの』つて」

その時の笑顔が本当に幸せそうで、スーザンもそれを見ているだけで幸せな気持ちになつた。敬愛する姉は、このことは2人の秘密ね、つていたずらつぱく笑いかけると、指切りゲンマンを交わした。2人はどうやらお互いにお互いを好きあつてたみたいで、近いうちにここから出て結婚する約束まで交わしていたそうだ。

「だけど」

今までどこか慈しむような声だつたのが、突然がらりと変わつた。

「急におかしくなつたの、姉様。目は虚ろだし、気分の上がり下がりが激しい。突然ハイになつたかと思えば、次の瞬間には泣いてたり。それに、もともと細かつた体が更に細くなつていつたわ。短期間で、異常なくらいに」

見る見る骨と皮だけの姿になつたリーランは、それでも営業し続けた。

もとより人氣のある彼女だったので、それでもお客様はついていた。

「けど、異常は止まらなかつた。ううん、もつとひどくなつていつた。ある時なんて、髪の毛を振り乱しながら奇声を上げたり、他の人の部屋に乱入してお客様の首を絞めたり。あまりにも奇行が激しく

なつたから、さすがに女将さんが姉様の営業はやめさせたわ。そして地下にある部屋に、鍵をかけて閉じ込めた

それはきっと、女将さんにも苦渋の選択だったんだろう。情があふれてるのが目に見える程の人だから。

「それでも姉様は回復しなくて。そのまま地下の部屋で、眠るようになくなつたと聞いたわ」

花街の地下に作られた部屋。それは、ただの部屋じゃないのは知っている。

ここで働く女達が鍵を破った時、お客様が館でのルールを破った時。地下にある牢に閉じ込め、様々な拷問にかける場所。

陽の当らない、暗く湿つた地下牢で、ひつそりと死んでいったリーラン。

きっとリーランも、そして同じ花街で働く女たちもみんな、辛かつたはず。

誰も望んでいなかつた結末。

「後で調べてみたら、それが今裏で密かに回っている、白い悪魔と呼ばれる薬のせいだつていうことが分かつたわ。症状も、薬の切れたあとに出る副作用も、噂と同じだから」

確かに、話を聞く限りおそらく白い悪魔の仕業だと思つ。あれは人間の神経を蝕んで、廢人にしてしまつ、恐ろしい薬。

「姉様は最後まで言わなかつたわ。それをどうやって手に入れたの

か。ただずつと、会いたいって言つてた。あの人に会いたい、会えたらこの苦しみからも解放されて全て解決するのについて。それで私は思い出したの。姉様が私に、私だけに教えてくれた、愛する人の存在を

全てはそこから狂い出した。なら、姉様をあんなに苦しめたのは、その男のせいだ。

そう思つた。

「……それで、その人は一体」

あたしの眩きに、スーザンは怒りと憎しみを込めて答えた。

「ゾイド男爵、きっとあの男が姉様を殺したのよ……つー！」

## 心配する王子

スーザンが自分の部屋に戻った後も、あたしはしばらくそこで座り込んでいた。頭の中ではさつき聞いた彼女の言葉がぐるぐる回っている。

あの人に会えたら全て解決する。彼女が苦しかったのは、おそらく薬が切れたことによる禁断症状からくるものだろう。それが解決するつてことは。

もし彼女の話が本當なら、ゾイド男爵がリーランに薬を渡して、麻薬依存させたことになる。リューート王子が持つて来た書類をちらりと盗み見た時、男爵の名前はなかつたように思うけど……。

実は彼も麻薬犯売人として暗躍している一人ということかもしかしたら売人ではなく、買つてる側かもしけないけど。

「…っておい、お前！聞こえてんのか！？」  
「うわ！…びっくりした」

思索に耽りすぎてたから、主が声をかけてきたのにも全く気が付かなかつた！

見上げると、そこそこに乱れた髪の毛と服を身につけたゼイル王子が、そりやあもう不機嫌そうに立つていてるではないか。

… その乱れ具合、やつぱりそういうことですよね。

ラピス様のいい匂いが、ゼイル王子から香つてくるし、そういうあ

れなんですよね、はい、分かっておりましたけど。

それにしても、今のゼイル様は特にいらっしゃる様子。ちつと舌打ちをすると、あたしの横に乱暴に腰掛け、例のあれを口に咥えた。

あ、そっか。あの部屋禁煙だつたつけ。そりゃあフラストレーショングもたまるわな。

納得。

「うう」機嫌の時は、王子危うきに近寄らず精神が働くから、あたしはいつもダッシュで逃げ出すんだけど……。さつき聞いた話のせいで、なんかそういう気分にならなかつた。

すると王子はまたまた舌打ちすると、さつきつけたばかりの火を消し、あたしの顎を持ちあげると自分の方に向かせた。

あーうー、なんかストレス解消にいたぶられるのかなあ、お得意のでこピン？このまま後ろに投げられる？それとも新技？なんて考えてたら、予想外の行動された。

「……っ

「熱はないな」

「ごつんと当たるおでこ。あたしとそう変わらない王子の熱が伝わってきて。

いつもと違う行動に、あたしは驚きすぎて声すらせずに硬直する。な、な、なに、コレ。ゼイル様があたしの体調を心配して、熱を測

るだあ！？そんなお優しい慈悲深い行動、今までされたことないん  
ですか？？？それともこれは、新たなじめの一環????？

「どう、え、えええ、な」

声は出ても

動搖しすぎて言葉が出ないんですが。ぱくぱく、空気を求める鯉のよつ。絶対今のあたし、間抜け。

「どうして、おやつたんですか？ そんな、あたしの熱を測る、なん

よつやく、言葉になつたのは、それからまたしげみへして。

「なんだ、俺は自分の従者の体調の心配もしたらいけないのか」「今までそんな素振り一回も見せたことないくせに、急にされたら驚くに決まってるじゃ ないですか！－！」

これは何か企んでるって考えるのが普通だと思う。だって、鬼畜だよ？ ッツ 気満載だよ？ そういう本性を知ってるから、余計に怖い。あたしが怯えた田で見ていると、王子はやれやれといった感じでため息をついた。

お願いだからあたしに分かりやすく説明して下せ。

「機嫌が悪い時の俺を見たら、お前絶対に逃げるだろう。なのに今日はそれが分かってて尚逃げなかつた。俺は逃げる獲物を追い詰め

ていたぶるのが好きなんだ。そんな、ウェルカム状態してやつを  
虧めても全然楽しくないだろ？が

その発言もどうかと思つけど。なんだ、それ。本氣で性格悪くない  
か？

「…だから、熱がないかどうか測つてみたと？」

「それにさつき俺が声かけたときも、心ここにあらずだつたらうが」

ああ、確かにそうだつた。いつもなら凶悪オーラにびんびん反応す  
るから、そんなこと絶対にないのに、さつきは本氣で耳に入らなか  
つた。気配にも気付けなかつたし。

「…で？本当に元気でも悪くないのか？」

まさかあたしのことを心配してくれるなんて…。正直あたしのこと  
なんて、サンデバックとかストレス解消用にしか思われてないんじ  
やないか、って思う時がたまにあつたから。

そんなこと言われるとちょっと嬉しいじゃないか。

主が本氣で気にかけている表情をしてたので、あたしは元気よく、  
返事をした。

「大丈夫です！…100%健康体ですから…」

本当に病気とかじやなくて。さつき、スーザンの話を聞いて、ちょ  
うと思考の渦に呑みこまれてただけだから。

あたしの返事に満足したのか、王子は安心したように笑つた。

その顔が…今まであたしが見たことないような、やけくそやかな表情で、一瞬ドキッとしたけど。

次の瞬間、あたしは一瞬でその気持ちを後悔した。

「じゃ、例のおじおきにも耐えれるってことだな

…あ、あれ？あたしが元気だつて分かった途端、それですか？

ひよつと、わざのときめきを返せ、馬鹿王子！－！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5749z/>

---

狂犬王子にお仕えしています。

2011年12月31日16時04分発行